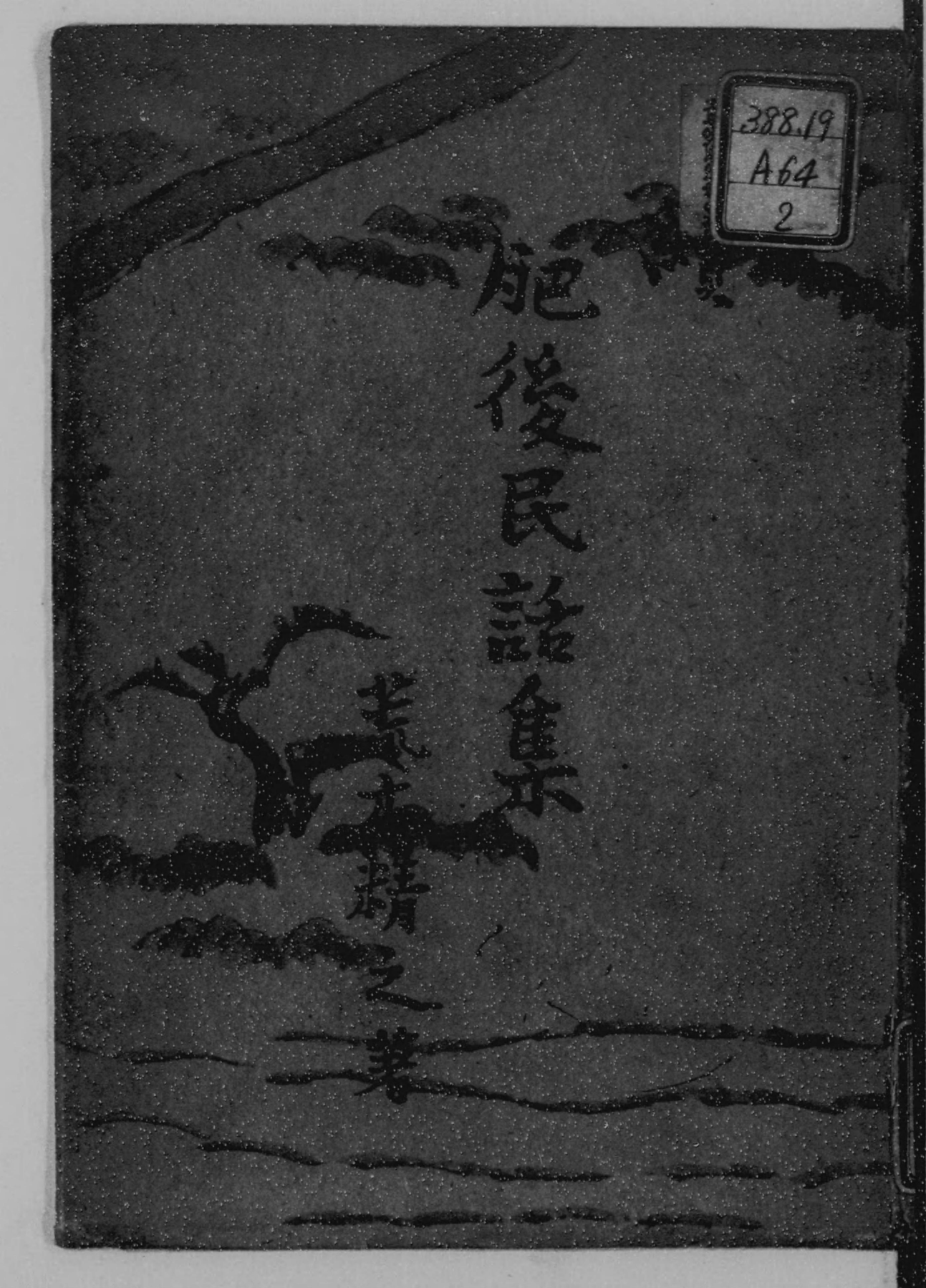

388.19
A64
2

0054711000

0054711-000

388．19－A64－2ウ

肥後民話集

荒木精之・著

地平社

続

昭和19

AID

388.19
A64
2

肥後民話集

荒木精之著

268

19, 1, 22

388.19
A64
2

肥後民話集

荒木精之

965
106

皇國文學の再建

『肥後民話集』の意義について

森本忠

文學と言ひ文學作品と言ふ場合、殆ど小說を意味する程に今日小說が盛大な流行を示してゐるが、小說は又創作とも呼ばれてゐる。この創作と呼ぶことについて、私はかねてから疑問を持つてゐた。

昔から物語と言ひ、或ひは戲作、稗史小說と言ひ現在では廣く小說と呼んでゐるけれども、それを特に創作と呼ぶに至つたのは、果していつの頃からであらうか。創作と言ふ語は試みに手許の漢和辭典を引いてみても、「はじめつくること、新たに文書を著はすこと、又はその著作物、新作」と解してあつて特に小說の意味はないのである。物語、戲作、小說といふ場合は、三者各々多少の時代的又は形式上の差別があるわけであるが、創作といふ場合は全く小說の異名に過ぎない。然らば何故小說を創作と呼ばねばならないであらうか。私はここに或る心理的な要請がある

と思ふ。

明治以來の小說傳統（敢て傳統と言ひ得るならば）は皇國本來の文學の本質に根ざして發展向上を辿つて來たといふより、すべて西歐傳來の觀念及び形式に依存して來たものである。坪內博士の小說神髓による寫實主義に始まつて、浪漫主義、自然主義から白樺派の人道主義、新感覺派、形式主義、プロレタリア文學、新心理主義、つつ込んで言へば近來の民族主義や全體主義或ひは國民文學に至るまで、皆盡く起原を西歐に持つものの輸入でないものはない。一つの文學乃至文學運動があつて、それが發展して他のものに變化成長してゆくといふ徑路を取らず、一つのものがあつて飽きられれば全く捨てて顧みられず、他の全然別個のものに移るといふのが今日までの實狀であつた。無節操な轉向といふ事は强ち左翼運動のみに見られる現象でなく、文學運動に於ても運動それ自身の發生が、有機的な成長發展の結果でなく、木に竹をついだやうな突然變異であり、轉向であつた。

この場合新しいといふ事は、古きものの生成發展、即ち自己自身の本質には何等關係がない。一に外國よりの輸入と言ふ事にかかつてゐる。輸入のみが新しいのである。

この質の發展による變化でなく、外よりの輸入を新となす考へ方は、必然的に固有本來の傳統

を無視する。極端には、傳統を破壞する事によつてのみ、新は得られると考へるのである。

眞の皇國文學の傳統としてはせいぜい樋口一葉位までであつて、それ以降の小說は繼ぎ穗に足すに繼ぐ種を以てした異國種であつた。所謂文學精神なるものは異國精神そのものと言ふより、異國の植民地第二世的精神であるのは當然である。幾多の試み、運動を經て、ひこに今日小說は落ちつくべき所に落ちついた形である。その完成された純粹型は何と言つても私小說であるが、この最も日本的と言はれる私小說にさへ、國の生命の鼓動は甚だ稀薄であり、ともすれば個人主義の最後の逃避所となつてゐる觀がある。

毎日幾つも幾つも打出される文章も內容も型にはまつた小說には、何等新鮮な感觸も獨創もない。しかもそれをしも創作と呼んでゐる。これは外來文學に依存して形式上のアナーキズムに陷つた文學者の見果てぬ夢の名殘りとも言はうか。陳腐、陋習と觀じた一切の傳統を打破して、新しきものへ新しきものへと追求せんとする彼等のはかなき希望でもあらうか。しかも事實は、創作と言ふ名に背いて何等の新しき獨創も得られぬヂレンマに陷つてしまつた。

新しく作るといふ事は無より有を生ぜしめる事ではない。外國文學の輸入により皇國文學を肥やすことはありうる。しかし文學の本質は飽くまで本源自發でなからねばならぬ。我國にある所

のものを取つて以て、新たな文學を制作してゆくこそ本態であり、文學の健全なる發展の相でもある。

我國の古典は如何にして作られたかと言ふと、所謂創作といふ事よりも蒐集整理といふ事によつて成立してゐる。自らの私意によつて創作したものを、己の名によつて書き止めるといふ意志は、古人には殆どなかつたといつていい。個人主義的な近代人と異る所である。文學は西洋と違つて必ずしも公けに發表する意圖を以て作られるよりも、私人間に作られては消える性質の方が強かつた。否、作るといふより傳へるといつた方がより適切であるかもしれない。時には勅命により、時には或る個人によつて蒐集され整理されて成書となつた。その場合その採集者の個人が何者であるかと言ふ事は、殆ど問題とされなかつた。個人の名前などよりも、採集される物そのものの方が大切であつたからである。記紀萬葉のやうな大切な古典もこのやうにして成書となつた。私人の創作とは別個の立場に立つ文學の成立であらねばならぬ。

この採集整理の仕事は、近代の文學者間に全く忘れられてしまつてゐた。それは傳統無視の風潮と、「創作」の野心を抱く近代的個人主義の故であらう。自分自身より物を重く見る固有日本人の無私と敬虔、謙虚な心なくては、この仕事はできないからである。

最近私の眼に觸れたもののうちこれに近い仕事と見えたのは、長尾良氏の「地下の島」であつた。「地下の島」については「新潮」誌上保田與重郎氏の深切な紹介評論があつて愚文の一行も附加へる必要を見ないが、かかるものこそ本來の文學であり、文學者の仕事と稱し得べきものである。更に意義あるものとして私は今度の荒木精之氏の「肥後民話集」を是非擧げたいとおもふ。

「肥後民話集」の大いなる意義功績については、案外著者荒木君自身意識されてないかもしれない。然し私は皇國本來の文學の在り方を確立された點に於て、實に重要な意義があると思ふ。殊に神風連を中心とする肥後勤王顯彰の、身を以てする實踐と表裏して、この民話の採集が行はれたことに、深い意味を見出すのである。

事は言にて、事言は二にして一である。と擧げせず默々として實事にいそしむひとと、ことあげして大いと論じ又は歌ふこととは、僞はらざる天眞の誠より發する。誠は眞事でもあり眞言でもある。まことの政治家、まことの武人が金石の言葉を出し、錦繡の詩歌を賦するは自然である。

今日愛國精神の高揚は勿論結構であるが、皇室に對し奉る忠誠、國家に對する奉仕が單に義としてのみ觀ぜられては、自然の人情との對立を誘つて却つて危險であると言はねばならぬ。所謂

日本主義なるものが文字通り主義となりイディオロジーとなる時、それは必ず相對的位置に墮し去り、他の主義やイディオロジーとの併立を許容する事となる。荒木氏が若し勤王事蹟顯彰のみを言ひ、尊王攘夷のみを言つてゐたとしたら、今日の時勢に乘るイディオロジストと同一視されたかもしれない。氏は身を以て參ずる實踐を通じて、ここに尊王とか愛國とか言ふ事が、理や義でなくおのづからなる情であることを發見したのである。即ち自然といふことを知り得たのである。この理念ならぬ自然の發見體認は、勤皇事蹟と一體である所の民話傳說採集となつて荒木君の上に現はれたものと私は察する。

民話傳說は風の如く庶民の間を通りぬける。人の口から耳へと語りつがれ語り弘められる。それはとらへようとしてもとらへ難き、漂泊性を有する。けれども亦その中には不滅不屈の民族の魂が宿つてゐるのである。變遷と精錬とを經て一つの話型を成したのも、語りつがれる毎に新しい生命を呼び起す。說話は書き止められる人の手に渡つた時、歪曲され、變形されることを許さない。然しそこには又蒐集者の鋭い感覺によるきびしき整理がなされなければならぬ。

一體民話採集に當つて、科學的といふ事はむしろ避けなければならない。私は民俗學といふものを信用しない。藝術的直感が一切である。それは說話がそもそも藝術として、心理的要素の上

に成立つてゐるからである。從つて說話を正しき姿に於て把握し書き取ることは、正に藝術家のみに許された仕事である。そしてそれは又藝術家にとつて榮譽ある仕事である。何故ならば「創作」は作家の一人の仕事であるけれども、これは多くの作家の作品を統合する仕事であり、又言はば民族、鄕民との共同作業でもあるからだ。更にこの仕事は仕事そのものの中に歷史の背景をもち、歷史を通じて遙遠なる我等の祖先、神につながるものをもつからである。

いかしき尊き神々も、この一見卑俗な、自然流露の說話や歌謠の奥にいますのであつて、粗野、卑俗と斷ずべきではない。古事說の尊さ美しさも、この自然流露にあるのである。荒木君が草莢を分けて神風連の墓に求めたものも、邊陬を歩いて老翁の記憶に求めたものも實は同じものであつたのだ。

私は荒木君のこの種の仕事の意義が、廣く世間に認識せられて、迷妄の夢の中に沈沒する今日の文學者に警鐘を鳴らし啓發せんことを望むものである。

（日本談義昭和十八年六月號）

目次

第五十一話　阿蘇んじようと片眼の男の話……一七
第五十二話　泣く泣く馬に乘せられて行く話……二〇
第五十三話　思ふままにはいはれぬ話……二七
第五十四話　いも好きな座頭もこれには閉口した話……三一
第五十五話　田舍者がはじめて鏡を見て一騒動おこした話……三三
第五十六話　金持になりそこねた慾深爺の話……三七
第五十七話　かんなべ要助の話……四一
第五十八話　片腕をもらひに來た河童の話……四四
第五十九話　二人のフユジの話……四八
第六十話　權現山と不動山とが首ひきした話……五一
第六十一話　虱太夫とコセカキと眼たゞれの話……五四

第六十二話　味噌豆を便所でおかはりした和尚の話……五七
第六十三話　阿彌陀さんこそ迷惑な話……六三
第六十四話　エーカンとサソウの話……六八
第六十五話　酒好きな彦一が酒をやめる話……七三
第六十六話　錨の模様の着物の話……七六
第六十七話　船大工と座頭の話……八〇
第六十八話　村一番の長頭をさがし出してきた話……八二
第六十九話　藥屋と呉服屋と酒屋のおかみが屁くらべをした話……八六
第七十話　山姥を風呂の中に焚きころした話……八九
第七十一話　因果はめぐる話……九三
第七十二話　不思議な尺八竹の話……九七
第七十三話　蕎麥の莖は何故赤いかの話……一〇二
第七十四話　地藏さんがお禮に來た話……一〇七

第七十五話　按摩に化けてまんまと馳走にありついた狐の話……一一〇
第七十六話　澤庵と長箸と碁盤の話……一一四
第七十七話　恥をかかせた尻を水ひたしにした話……一一八
第七十八話　歌で見分けた嫁もらひの話……一二三
第七十九話　ノツペラボンの話……一二七
第八十話　墓の中で生れた嬰兒と亡靈の話……一三三
第八十一話　萬吉狐と木原孫四郎のだまし合ひの話……一三七
第八十二話　死人を眞似て大晦日に借金取をきりぬけた彦一の話……一四四
第八十三話　彦一と化けくらべして懲り懲りしたおさん狐の話……一五三
第八十四話　蕎麥になつた男の話……一五七
第八十五話　謎ずきな親爺の話……一六三
第八十六話　馬鹿力の男の話……一六七
第八十七話　トノバンの德兵衛狐と忠吉の話……一七一

第八十八話　思ひつめて石の蛙になつた話……一七九
第八十九話　鐵砲の先をツン曲げて鴨を撃つた話……一八〇
第九十話　何故によい初夢を人に話さないかの話……一八五
第九十一話　タニシが孝行した話……一九二
第九十二話　高さくらべに降參した山の話……二〇一
第九十三話　三年寢太郎の話……二〇六
第九十四話　百足は錢の精といふ話……二一二
第九十五話　追剝から二本の刀をとりあげた彦一の話……二一五
第九十六話　おまん屏風の話……二一一
第九十七話　クスカキ三助の話……二二五
第九十八話　我のつよい座頭の話……二二九
第九十九話　子供にとんでもない長い名をつけた話……二三四
第百話　タニシとイタチが競走した話……二三九

續肥後民話集

第五十一話　阿蘇んじようと片眼の男の話

昔は阿蘇生れの者のことを阿蘇んじようといつて、熊本では輕蔑してゐたものである。

或る年の冬のこと、阿蘇生れの男が一人、お城下熊本にむかつて旅立つた。寒い山の中から出かけることとて、布子（綿入）をきこんでゐたが、彼はその上にかたびら（麻）を一枚重ねてゐた。

阿蘇ではその頃（今はどうかしら）冬でも外に出る時はかたびらをきるならはしがあつたのである。それは傳へらるるところによれば山蛭の多い阿蘇の山徑を歩かねばならぬ土地の者にとつて、かたびらは蛭よけだつたからである。蛭は麻をきらふので年中、山林を歩くものは、かたびらをきてゐた。

で、その男も、阿蘇の山中を通つて二重の峠から熊本に出なければならぬので、

例によつて布子の上にかたびらをきて、やつてきたのであるが、熊本につくと、誰でも町を通る者がじろじろと彼の姿を見ては笑ふのであつた。

男はしかし何を人が笑ふのか一向に氣づかなかつた。彼は顔に墨でもついてゐるのかしら、と思つたり、いやそんな筈はないが、と思つたりした。布子も仕立おろしのものだつたし、麻もま新しかつたから、彼は自分の着物が笑はれてゐるとは夢にも思はなかつたのである。

ともかく宿につかう、と、彼は、とある一軒の白川にのぞんだうすぎたない宿屋ののれんをくぐつた。

出てきた主人は片眼であつた。片眼の主人は前掛姿でペコリと頭をさげて、

「いらつしやい。」

と挨拶したが、顔をあげて旅人の姿を見ると、妙な顔をした。

「どちらからですか。」と宿帳を開いて片眼の主人は耳にはさんだ筆をとつた。

「阿蘇から來ましたたい。」

と、布子かたびらの旅人は答へた。

「阿蘇んじようだつたか、道理でー」

と片眼の主人はにやつと笑つて小さく云つた。そしてこの山の中から出てきた山猿のやうなおかしな田舍者をひやかしてやれと思つた。

主人は客人を一應部屋に案内した。そして茶をくみながら、

夏と冬一緒にきたか阿蘇んじよう
布子もあればかたびらもある

と歌つた。主人はこの即興の歌をきいたら目の前の田舍男は顔をまつかにしてはづかしがるだらうと思つたのである。しかし阿蘇の客は大して彼が期待したほどの變化はなかつた。ただ町の者がみな笑つて自分を見たのは、かたびらにあつたのかと氣づいたやうであつた。

しかし片眼の主人がさう歌つたのを、だまつてゐてはこちらが負けいくさだとでも思つたのか、阿蘇の客は、主人の片眼を見てゐたが、えへん、と改まつて、

夜と晝一緒に來たか宿屋さん
寢た眼もあれば起きた眼もある

とうち詠じた。

これには片眼の主人が奇襲をされたやうなもので、ねたたまれずに主人は、その部屋から出て行つてしまつた。

第五十二話　泣く泣く馬に乘せられて行く話

これは昔、或る店にあつた話である。

そこは相當大きな店で、番頭も三人ゐて、みんなよく働いた。店には一人の年頃の娘がゐて、主人夫婦はその一人娘を大へん可愛がつてゐた。

そろそろ養子の話が、主人夫婦の間に眞劍に考へられてゐた。店のことを思ふとやはり店のことにくはしい者を娘の養子にして、家をつがせたかつた。主人夫婦は

店にゐる三人の番頭の中から娘の養子はえらばうと思つた。そしてあれこれ考へたあげく、一番新しい番頭をえらぶことに内定した。

しかし三人の番頭の中から一番新しい番頭をえらんで養子にし、店をつがせるといふことはこれは問題であつた。古參の番頭がだまつてゐるわけはないし、古參の番頭が事毎に、いやがらせや皮肉や邪魔や、さうでなくとも仕事に精を出さぬやうにでもなつたらやはり店の方が心配だつたのである。

主人夫婦は、いろいろ考へた末に、表面穩當な方法をとることにした。主人は三人の番頭を或る日呼んで次のやうに云つた。

「實はお前たちも知つての通り、わしの娘も年頃だし、今度婿をとりたいと思つてゐる。ところでそれをお前たち三人の中から選びたいと思ふのだが、お前たちはいつもわしのためにかげひなたなくよく働いてくれてゐるし、わしは三人とも一樣に信用してゐるのだ。それで、この中から一人を選ぶといふことはなかなかむつかしい。いろいろ考へてみたが、結局からしようと思ふ。それは、下の句に、泣く泣く馬

にのせられてゆく、といふのをするて一番よい歌をつくつたものを養子にしよう。どうだ、明日までに一つ上の句を考へてこい。」

そこで三人の番頭はそれぞれに顔を輝かして主人のそばから離れた。三人の番頭は三人とも、念佛のやうに、泣く泣く馬にのせられてゆく、泣く泣く馬に乘せられてゆく、と云ひつつ上の句を考へた。

晩になつて、主人は一番新しい番頭を、使に出した。外はまつ暗であつた。番頭は、道々、泣く泣く馬にのせられてゆく、泣く泣く馬に乘せられてゆく、とつぶやいて上の句を考へながら歩いてゐた。ところがまつ暗な道なので行手に何があるかわからなかつた。彼は向ふからやつてくる人とぶつつかつてしまつた。彼はあはてとびのいたがおそかつた。向ふの人は道にぶつたふれた。彼は深くわびてその人を引きおこした。

「けしからんじやないか。」

とその人は云つた。彼は「すみませんでした。」とあやまつた。その人は、

「今、お前はぶつぶつ言つてきよつたがあれは何か。」

ときいた。そこで彼はしかじかと事情を話し、泣く泣く馬にのせられてゆく、と云ひながら、その上につける句を考へてゐた、と云つた。

「さうか、ぢやその、泣く泣く馬にのせられてゆくの上によい句をつけたら、その娘さんをもらへるのだな。」とその人は云つた。

「はい。」

「そんな事情なら、おれが教へてやる。よいか、朝草にかりこめられしきりぎりす、どうだ。朝草にかりこめられしきりぎりす泣く泣く馬にのせられてゆく、よいか。忘るるな。」

そしてその人は立ち去つた。眞暗な夜道のこととて彼は相手の顔を見ることは出來なかつた。大へん親切な人もあればあるものだと思つて、教へられた歌をくりかへしくりかへし覺えこんで、使から歸つた。

さていよいよ翌日になつた。主人は三人の番頭をよんだ。三人ともおもてをかが

やかしてゐた。

「きのふ出しておいた下の句の、泣く泣く馬にのせられてゆくの上の句が出來たらう。その一番よいのに約束どほりうちの養子をきめる。」

と主人は三人を見まはして云つた。そして、一番々頭にむかつて、

「さあ、お前から云つて見れ。」

そこで一番々頭は、聲づくりして、

十四だといへばよかつたに十五だといふたばかりに泣く泣く馬にのせられてゆく

と答へた。これは八百屋お七の淨瑠璃をきいてつくつたものであつた。主人は笑つて、

「えらい長い上の句ぢやな、十四だといへばよかつたに十五だといふたばかりに……泣く泣く馬にのせられてゆくか、……ふん、お前は何と出來たか。」

と今度は二番々頭に向つてきいた。二番々頭も聲づくりして、

ああ痛や尻のねぶとが腫れたちて泣く泣く馬にのせられてゆく

と答へた。主人は笑つて、

「何ぢや、ああ痛や尻のねぶとがはれたちて……か、うん、なくなく馬にのせられてゆく。なるほどね、でも歌としてはようなかごたるね。次はどうだ、何とつくつたか。」

「はい。」と一番新しい番頭は頭を下げて、

朝草にかりこめられしきりぎりすなくなく馬にのせられてゆく

と云つてさしうつむいた。

主人はおどろいたやうに眼をみはり、

「もう一度いつて見い、朝草に……刈りこめられしきりぎりす、なくなく馬にのせられてゆく、……ふん、こらアいい歌だ、こらア、大したものだ。先の二人の者とは比較にならぬ立派な歌だ。約束どほり、それではうちの娘の婿はお前にきめる。二人のお前たちもきいた通りだ。わかつたか、分つたらあつちにいつてよい。」

さう云つて二人の番頭を去らしたあと、主人は、一番新しい番頭にむかつて、

「お前の歌は實によく出來とるが、あれはお前が一人で考へ出したつか。」と訊いた。するとその番頭は深く頭を下げて、

「いいえ、實は何をかくしませう。あれは私の智惠で考へ出したものではありません。昨夜お使に行つた途中、誰かに行きあたつて、その人から敎へられたものです。」

と昨夜の出來事をくはしく主人に話した。主人はその話を最後まで聞き畢ると滿足さうにほほゑんで云つた。

「よく正直に云つたな、實は昨夜お前に上の句を敎へたのはこのおれだつたよ。お前を見こんで養子にしようとして、おれが闇夜に先廻りしてわざとお前にぶつかり、敎へてやつたのだ。しかしいくらお前を見こんでも、お前が不正直ならどうにもならんと思つて、今、そしらぬふりして聞いてみたら素直にすらすらと本當のことを云つてくれた。お前が正直者だといふこともよくわかつた。養子にするぞ。」

間もなく彼はそこの婿養子となりその大きな店をついだといふ。

第五十三話　思ふままにはいはれぬ話

これも歌に關したものであるが——

或るところに孫娘二人とばばさんと三人ぐらしをしてゐる家があつた。この三人は三人ともたいへんポタモチが好きで、ポタモチといへば眼の色かへるありさまであつた。

その家に或る人がポタモチを三つ皿に入れてもつてきた。

さあ、大へんである。三人が三人ともそのポタモチを見ると、つばをのみこみ、よだれを垂らし、今にもつかみとらんばかりの氣配であつた。そして一つの手が皿の上に出たが最後たちまち大立ちまはりにでもなりさうであつた。

さすがに姉娘はその險惡な空氣を思つたか、仲直りでもするやうに、云つた。

「三つだから一つづつたべませう。」
「さうね。」
と妹娘も、とても一人で三つはとれぬと感づいてあきらめたやうに云つた。「一つづつわけませう。」
しかしばばさんは二人の孫娘の方をむいて首をふつて云つた。
「いかん、いかん、こんなボタモチを一つづつくつてもなんにもならん。これは歌をよんで一番よい歌をつくつたものが三つともたべることにしよう。」
「それもさうな。」
と姉娘が、まかりちがへば三つともものさるかもしれんと思つたのか、にこりと笑つて云つた。
「そらアおもしろか。」
と妹娘も皿ごと貰へる錯覺に落ちたやうに元氣よく云つた。
「それなら、おもふままにはいはれざりけり、といふ句に上の句をつけることにしよう。」とばばさんが云つた。

しばらく皿の上の三つのボタモチを中にして三人は、おもふままにはいはれざりけり、とお經のやうに口々にくりかへして上の句を考へるやうであつた。
「はい出來ました。」と姉娘が一番に自信ありげに云つた。
「はい、私も出來ました。」と妹の方も名乘りをあげた。
ばばさんはぢろりとずるさうに二人の孫娘を見て云つた。
「そんならいつちよ、いつてみなはり。」
そこで姉娘は美しい聲で、
山かつの薪に花を折りそへておもふままにはいはれざりけり
と歌つた。山かつといふのは木こりのことである。木こりが薪をとつて、いざ結はへようとした時、傍に咲いてゐたきれいな花を折りそへたので、そのまま思ふままに結はへると花をいためるし、なかなか思ふままには結はれない、といふ意であるらしい。なかなか上品なやさしい歌である。

すると妹娘も姉に負けない美しい聲で、

行きちがふ舟に都のこととへばおもふままにはいはれざりけり

と歌つた。これは渡船風景か何かであらう。上る舟と下る舟とが行きちがふ時、舟の上から都のことを少しでもきかうと話しかけても、すぐ行きちがひになつて、なかなか思ふままにはいはれない、といふ意であらう。これもまた上品な歌である。

二人の孫娘たちのそれぞれの歌の披露がすんでいよいよばばさんの番になつた。

「ばばさん、早く云つて。」

と二人は左右からばばさんに催促した。するとばばさんは突然、手を皿の上にさし出して、三つのボタモチをつかむと、三つとも一ぺんに口の中につめこんでしまつた。二人の孫娘はおどろいて、ばばさんの破約を責めたてると、ばばさんは、眼を白黒さしながら、

ボタモチを三つ一しよにほうばれば思ふままにはいはれざりけり

と歌つた、といふ。

第五十四話　いも好きな座頭もこれには閉口した話

これもまた歌が出てくる話であるが——

或るところに、座頭さんがやつてきて、泊ることになつた。そこでそこの人は、心配さうな顔をして座頭さんに、

「おとまりになるのはかまはんけど、たべものはいもしかありませんばい。」と云つた。すると座頭さんは、

「いもが一番よかですたい、大好物ですよ。」

と云つて、それを承知でその家に厄介になつた。はたしてその日から、からいもがでた。

「これは結構ないもですな、とてもおいしかですばい。」

と座頭さんはお愛憎を云つてたべた。翌る日もまたその翌る日も、からいもばかり

である。座頭ざんはそこを根城にアンマの業をしてゐたが、さすがに朝も晝も夜も、來る日も來る日もからいもばかり食はされるのには閉口した。アンマをとつてゐてもブスッ、ブスッとおならが出てしかたがなかつた。ほんとにこはからいもばかりしかないのか、と思つて氣をつけてゐると、さうばかりでもないらしい。家の者は別の食卓で米の飯をたべ、さかなもたべてゐるらしい。それは匂ひやまた子供たちが、ごはんといつて茶碗をさし出す氣配からもわかるのであつた。それなのに、客である座頭には、家の者はからいもばかりをくはしてゐた。

座頭はさすがに米の飯の匂ひがたまらなく戀ひしくなつてある日、食事の時、家の者があつまつてにぎやかに食事はじめたのを知つて次の一首を大きな聲でうたつた。

ときどきはあねのおよね(お米)を出しやんせいもとばかりは約束はせぬ

これは時々は米の飯も出して下はり、いもばかりは食はれまつせんばい、といふ意である。この歌をきいた家の主人はさうだつたか、とうちうなづき、すぐやつて

きて、

「これはどうも失禮しをしたな。あああたがとんとはじめに、いもが一番よかですたいと仰言つたので、うつかりほかのものをもつていつて叱られるより一番お好きないもを毎日あげるやうにしたがよい、といつて、わざわざ毎日いもを特別に煮てゐました。」

とこれまでいもばかりくはした事情を話して、あやまつた、といふことである。

第五十五話　田舍者がはじめて鏡を見て一騒動おこした話

五箇ノ庄といへば平家の落人たちが安住の地としてえらんだ山の中で、そこに住みついた人たちは長いこと全くよその土地とゆききすることもなかつた。そのため、ついしばらく前までは、われわれが想像も出來ぬいろんな滑稽な出來ごともあつたやうである。全く文明といふものからきり離された土地だつたからである。

この話も、今からさう遠い頃の話ではない。

ある時、五箇ノ庄の男が、生涯に一度の念願と思つてゐた熊本のお城下ゆきがかなつた。彼は熊本にやつてきたが、見るもの、きくものすべてめづらしいものづくめである。唐人町を歩いてゐて、とある鏡屋の前を通りかかつた彼は、ふと鏡を見てびつくりした。その鏡の中に片時も忘れたことのないなくなつた筈の父親がゐたからである。

「おや、でださんな、かよなところにをりもしたか。」

と、彼は涙をながしてよろこんで、その父親を買ひとり、大切にもつて歸つた。彼は自分の顔が父親の顔に似てゐることなどは知らなかつたのである。むろん鏡といふものも知らなかつた。彼はすつかり父親だと鏡を思つたのである。彼はこれ一つあればいつでも父親にあへると思つて、買つてきた鏡を、そつと箪笥の抽出に入れた。そして父親にあひたくなると、箪笥の抽出をあけて彼はにこにことその鏡に見入るのであつた。父親も彼がのぞくとうれしさうににこにこした。彼は大切に大切

に父親をしまつておいた。

ところが彼の細君は、彼が時々箪笥の抽出をあけてはこの上なくうれしさうにしてゐるのを見て、不審に思ひ、或る時、そつとその箪笥の抽出をあけてのぞいて見た。するとそこの鏡に細君の美しい可愛い顔がうつつた。

細君はびつくりした。まつ青になつて、がくがくとからだをふるはした。そして良人が歸つてくるのを見ると、狂人のやうになつて、くつてかかつた。

「あなたはこのわたしといふ妻をもちながら、また別にかくし女をもつてゐなさる。ひどい人だ。あんな箪笥の中にかくして、私にはそしらぬふりをし、時々あそこをあけてはにこにこやつて會つてゐなさる。實にひどい人だ。すぐあの人を追ひ出して下さい、でなければわたしが出て行きますッ。」

「こらこら、お前は氣でもくるつたのか。おれが箪笥の中にかくし女をもつてゐるなぞ、とんでもないことを云ひ出したりして、何を感ちがひしとるのか、箪笥の中にはでださんを入れてゐるのだぞ、バカが。」

「うそ、うそ、でださんなんて、でたらめいつて、わたしはもうちやんと見たのだから、だまされはしない。どこまでもうそを通すつもりなのね、あなたは、ひどい、ひどい人だよあなたは、いつもこつそり簞笥をあけては、にこにこして笑つて話してるくせに。あんなきれいな若い女をかくして、そしてでださんなんてでたらめいつて。いいから隣の比丘尼さんにさばいてもらひませう。」

若い美しい細君は逆上したやうになつて、家を出て行つたが、間もなく隣りの比丘尼をひつぱつてきた。

「さあ、びくにさん、見て下さい。あの人は簞笥の中の人をでださんだと無理にいふのです。でもそれは若い美しいかくし女にちがひないのです。さあ見て下さい。そして云つて下さい。」

「比丘尼さん、見て下さい。わたしがかくし女を簞笥の抽出にかくしてゐるなんてでたらめもひどい話です。かくし女かどうか、わたしは父親を大切にそこにしまつてゐたのです。それをかくし女なんてとんでもない、見て下さい。」と良人も興奮して比丘尼に云つた。

比丘尼は二人の爭ひをあきれたやうに見てゐたが、二人からせがまれて、問題の簞笥の抽出をあけて中をのぞいて見た。するとそこには父親もをらず、若い美しい女もをらず、いつの間にか比丘尼さんがゐるのであつた。

「まあまあ、あなたたちはどうしたのです。ここにはお父さんもかくし女も見えませんよ。比丘尼さんがゐらつしやるぢやありませんか。それにあなたたちがみつともない夫婦喧嘩をするので、とても心配さうな顔をしてゐられますよ。」

と、比丘尼はそれが自分の顔だとは知らずに云つたといふ。

第五十六話　金持になりそこねた慾深爺の話

あるところに金比羅(こんぴら)さんを深く信仰してゐるおぢいさんがゐた。はじめはそのおぢいさんは大へん貧乏者であつたが心がまつすぐで、よく働いて、信仰もあつい

で、いつの間にかお金持になつた。それを見たとなりのぢいさんはうらやましくて
ならず、自分もあんなお金持になりたいものだと思つた。
ある日、となりのぢいさんは、ぢつとしてをれずに、心のまつすぐなおぢいさん
の家に行つて、
「おぬしはもとはとても貧乏だつたが、どうしてそんなに金持になれたかい。」
ときいた。心のまつすぐなおぢいさんはにこにこして、
「そらアお前、金比羅さんのおかげたい、金比羅さんによくまゐるけんだろたい。」
と答へた。
となりのぢいさんはそれをきくと、ひどくよろこんで家にかへつた。
「お金持になるなんてわけはない、おれも一つこれから金比羅さんにまゐつてこ
う。そしてとなりのやつこさんよりかもつともつと大金持になつてやるぞ。」
慾ぶかのぢいさんはにたりと笑つて、金比羅さんに出かけていつた。高い石段を
上つてゆくのも、さほど苦しいとは思はなかつた。心がいそいそとしてゐたからで

ある。
やつと金比羅さんのお社までやつてきた慾深ぢいさんは、やれやれと呼吸をとと
のへて、自分の村の方を見た。すると自分の家の小さくみすぼらしいのに比して、
となりのおぢいさんの家は立派な、大きなものであつた。それを見ると、自分もお
金持になつて、あのとなりの家よりかもつともつと大きい家を建ててやらうと思つ
た。慾深ぢいさんは金比羅さんのお社の前に坐つた。さて何といのつたものかとし
ばらく考へた。さうだ、お金のことはおあしといふから、おあしを下さいといのつ
てみよう、と思つた。そこで慾深ぢいさんは次のやうにいのつた。
「金比羅さん、金比羅さん、どうぞこのわたしにおあしを下さい、たのみます、い
のります、どうぞおあしを下さい。」
すると忽ち慾深ぢいさんがいのつてゐる眼の前に、天からニューッと大きな足が
ぶら下つてきた。慾深ぢいさんは眼をみはつてそれを見た。
「ははア、こらア自分がおあしを下さいといのつたのを金比羅さんな大足とまちが

へさしたつばい。金比羅さんなおあしがお金のことだとは知らつさんとばいな。そんならお金といふたがよかばい。よしよし、もう一度いのつてみよう。」

そこで慾深ぢいさんは改めてまたいのり直した。

「金比羅さん、金比羅さん、大足ではありまつせん、大金をどうぞめぐんで下さい。たのみます、いのります、どうぞ大金を下さい。」

すると大足はするすると上にひつこんでそのかはりに大鐘が下りてきた。

「おやおや、今度は大鐘が下りてきたぞ。ははア、こらア自分が大金を下さいといつたので大金を大鐘とまちがへさしたつばい。ふんふん、どうもこりや頭の悪い金比羅さんぞ。大鐘などもらつたつちや何にもならん。よしよし、そんなら金の方はあきらめて、米倉をたのんでみよう。米倉をいくつもいくつももらつたらそれでもよか。」

そこで慾深ぢいさんはまた改めていのり直した。

「金比羅さん、金比羅さん、大鐘ではありまつせん、大金を下さいとたのんだので

す。でも米倉でもよございます。どうぞ米倉をたくさんめぐんで下さい。たのみます、いのります。」

すると大鐘もするすると上にあがつて、その代り小めくらが數限りもなくあらはれた。小人の盲目である。どれもこれもそれがピンピン買うて、バチ買うて、と云つて、慾深ぢいさんの周圍をとりまき、はては、膝の上、肩の上、頭の上にも上つてきて、さはぎまはるのであつた。米倉をもらふつもりだつた慾深ぢいさんは、ピンピン買うて、バチ買うてとむらがりとりかこんだ小人のめくらの群を見るとあきれて、今は更にいのり直す力もなくなり、そこにぼやつとなつてしまつたといふ。

第五十七話　かんなべ要助の話

或る村に要助といふ男が住んでゐた。女房と二人きりの生活であつたが、理由は分らぬが村の者から排斥されて、つまり「かんなべ」をからはせられて交際が出來

なかつた。

秋になつて村の祭りがはじまり、鐘や太鼓で賑やかな事だつた。しかしその踊りの輪にも要助夫婦は入ることをゆるされなかつた。そこで强情でもあり、一面瓢輕な性質でもあつた要助は、この村の賑合に對抗して自分は自分一人でお祭りをしようと考へた。だがそれには樂器が要る。もとより貧乏な要助のこと、樂器など持合せてゐる筈もない。皿や鉢や鍋をたたいて見ても、ろくな音は出ない。

そこで、一策を思ひついて、女房を隣村へ走らせ、懇意な寺の和尚さんに賴んでお寺の鈴を借りて來た。振つてみると實にいい音が出る。それを女房に振らせる事にして自分は鉢卷をして踊りはじめた。

——チンチングワラン、チングワラン、よう嬶、鈴ふるにや

要助のうちから、陽氣な歌と鈴の音が聞えはじめた。くりかへしくりかへし歌つたり踊つたりしてゐる。村の者は何だらうとぞろぞろ要助の家に近づいて覗いてみたら、見覺えのあるお寺の鈴を女房が振つて夫妻ともども踊つてゐるので、中の一

人が寺へ知らせたと見える。小僧がその鈴をとり返しにやつてきた。戸をあけて入つてきた小僧は、

「要助どん、要助どん、鈴戻さんかい、和尚さんのおごらすばい。」

と怒鳴つた。しかし夢中になつて踊つてゐる要助夫婦の耳に入る筈がない。小僧は呆れてみてゐたが、その中自分もそれがあんまり面白いのでつひふらふらと中に加はり三人輪になつて踊りはじめた。

——チンチングワラン、チングワラン、よう嬶、鈴振るにや、要助どん、鈴戻さんかい、和尚さんの、おごらすばい、チンチングワラン、チングワラン

いつまで經つても小僧が歸らないので、どうした事かと寺の和尚もやつてきた。家の周圍には一ぱいの人立ちで、皆面白さうに美ましさうに覗き込んでゐる。見ると要助夫婦にまぢつて小僧も一緒に踊つてゐるのではないか。

したたかに叱りつけて鈴をとりあげる心算の和尚さんも、傍觀してゐながら「小僧が戻らんのも尤もぢや。」と呟いてゐたが、これもいつの間にか小僧のあとにつ

いて踊りはじめた。女房の振る鈴の音は益々冴えかへるのである。

——チンチングワラン、チングワラン、よう嬶、鈴ふるにや、要助どん、鈴戻さんかい、和尚どんのおごらすばい、小僧が戻らん、尤もぢや、チンチングワラン、チングワララン

おのづからなる諧調だ。此のありやうに、村の者達も、今まで要助を毛ぎらひしてかんなべからはせてゐた事を後悔し、改めて和睦を結んで一村丸く納まつたといふ話である。

第五十八話　片腕をもらひに來た河童の話

昔、熊本城下から少しはなれた石原村といふところに石原叶之助といふさむらひが住んでゐた。力もつもく、情もふかいので村ではこの石原叶之助のことをトノサンといつてゐた。ある年の夏のこと、村を流れてゐる白川で村の子供が水泳ぎをし

てゐて河童（ガハッパ）にひかれたことがあつた。そこの親たちが大へんなげいてゐるといふことを聞いたトノサンは深く同情して、

「けしからぬガハッパだ、よしよし、おれが退治てくれる。」

と、さつそく白川の流れに出かけて行つた。白川は今とちがつてもつと水量がゆたかであつたさうだ。トノサンはただ一人、ザンブとばかり水飛沫をあげて流れにとびこみ、川下から川上に、川上から川下にと幾度も幾度も泳ぎまはつて、ガハッパをさがしまはつた。ガハッパは村の子供を水底の自分の巣にひつこんで、ジゴ（ハラワタ）をひき出してたらふく食つて、いい氣持で巣から出てきた。そこをトノサンに見つかつてしまつた。

「やい、ガハッパめ、この村の子供をひきづりこむとはけしからんやつ、ゆるしておけぬからさう思へ。」

トノサンはやにはにガハッパにつかみかかつた。ガハッパはおどろいて、逃げようと身をもがいたが、力のつよいトノサンがその力一ぱいにつかんだ腕をふりほど

くことは出來ずに、却つてトノサンに片腕を引抜かれてしまつた。ガハッバはあやふくいのちまでもとられさうなのをやつと河の中にしづんで巣ににげこみ、虎口を脱したのであつた。トノサンはいまましさうにガハッバの一本の腕をもつて川から上つてきたが、川に上つてから手にしてゐるものを見ると、それはただ一本の藁になつてゐた。トノサンは呆氣にとられてそれを川にすてようかと思つたが、思ひ直して家にもつてかへつた。しかし一本の藁すぼでは誰にも自慢にもならぬのでトノサンは一人苦笑してゐたのである。するとその晩、トノサンが一人ねてゐると、雨戸の外で、しきりに名を呼ぶ聲がする。誰だらうと雨戸をあけて見ると月の光に照らされてガハッバがたたづんでゐた。

「おのれガハッバ、お前はまだ懲りずにここまでやつてきたか。」

とトノサンは大聲でどなりつけた。するとガハッバはあはれな聲で、

「實は畫間とられた片腕をぜひかへしていただきたいのです。」

といふのであつた。トノサンには一本の藁すぼにしか見えぬものがガハッバには死

活の問題らしいのである。

「お前のからだを一たんはなれた腕をもらつたところで、どうにもしようがあるまい。」

といふと、ガハッバは、

「いいえ自分どもは骨をつぐ方法をしつてゐます。」

といひ、涙ながらに、ぜひかへしてくれ、とたのむのであつた。

そこでトノサンは、

「よしよし、お前がこれからこの村から人をひかぬ約束をするなら今度だけはかへしてやらう。」

といつてかへした。ガハッバは非常によろこんで、

「決してこれからはこの村の人をひきません。」

とちかつて、冷たくなつた腕をうけとつてかへつた。それからといふものは他村ではガハッバにひかれる者があつても、この石原村からは誰一人ひかれるものはなく

なつた。夏の土用の三日目には河祭といつて、酒や胡瓜やウドンなどをそなへてガハッパをまつる風習が今も石原村につづいてゐるといはれてゐる。

第五十九話　二人のフュジの話

フュジといふのはブシャウモン（無精者）とでもいふやうな意味の熊本の方言である。

あるところに一人のフュジがゐた。この男、どこかに用があつて、バッチョ笠（竹の皮で作つたもの）をかぶつて出かけてゐた。バッチョ笠にはヒモがついてゐて、そのヒモをアゴにむすびつけてあるくものである。そのヒモがとけると、頭を少し動かしてもすぐ落ちようとするものである。その男はすたすたと歩いてゐたが、いつの間にかバッチョ笠のヒモがとけかかつてきた。普通の者ならこんな時、すぐ手をもつて笠のヒモをしめ直すのであるが、この男、フュジだから、手をあげてヒモ

をしめ直すのがめんどくさいのである。だからとけかかつたヒモはそのままにアゴをつき出して笠がずれて落ちぬやうに加減しながら歩いてゐた。ところがだんだんヒモはとけかかつてゆるくなつてくる。この男はそこでますますアゴをつき出し、ハテは口をあぐんと大きく開けて、そのアゴのつつぱりでヒモの具合をとりながら歩いてゐた。

ところでもう一人、フュジの男がゐた。そのもう一人のフュジの男も、何かの用で、腰にニギリメシをむすびつけた姿で同じ道を歩いてゐた。腰にニギリメシをむすびつけたのも自分でしたのでなくその細君がしてやつたのである。バッチョ笠の男が先で、ニギリメシの男がそのあとを同じ歩調で歩いてゐた。

その中にヒルになつた。後のニギリメシの男は腹がへつてきたので、ニギリメシを食はうと思つた。ところが、一寸手を動かしてその腰にむすびつけてある風呂敷包をときさへすれば何でもなく食へるのであるが、そこがフュジで、この男にはたつたそれだけのことがめんどくさいのである。それで腹がへつてきたのを我慢しい

しい歩いてゐた。しかし腹はますますへつてくるので、彼は一計を案じて、前を歩いてゐるバッチョ笠を頭にのせ、アゴをつき出し、大口を開いて歩いてゐる男をよびとめた。

「もしもし、前を歩いてゐる人、ちよつと。」

よびかけられて前の男は、アゴをつき出し大口を開けたままでふりむいた。

「何ぞわしに用かな。」

大口をあけたまま唇をあまり動かしもしないでさう返答したが、その發音はもとよりきはめて不明瞭なものであつた。しかし後の男はそれには頓着せず、自分の腰にぶらさげてゐるニギリメシを指して、

「どうぞこれなる腰のニギリメシの風呂敷包をといて下されぬか、といて下さるなら中のニギリメシの半分をあげてもよろしいが。」

といつた。

すると前の男は、

「とんでもないこと、おぬしの腰のニギリメシの風呂敷包をといてやるほどなら、わしはわしのこのとけかかつとるバッチョ笠のヒモをしめ直しますわい。」

といつたといふ。

第六十話　權現山と不動山とが首ひきした話

鹿本郡三岳村に英彦權現山があり、來民町の方に不動山があるのは御存じであらう。昔、昔の大昔、この英彦權現山と不動山とは義理の兄弟であつた。お母さんはまま子の英彦權現山をたいへん虐待し、本當の子の不動山の方はそれはそれは大切にした。虐待される英彦權現山は、そのためにつらい目にあひ、いくたびか泣くやうなこともあつたが、そんなことがたびたび重なるにつれて、いつしか、からだがきたへられ、どんなつらい目にも、雨にも風にも負けない丈夫な丈夫なからだになつてゐた。

一方不動山の方はお母さんがそれこそ目に入れてもいたくないやうに大切にして可愛がり、少し風が吹いても寒むからう、少し日が照つても暑からうといふ具合に氣をつけて、眞綿でつつむやうにそだてたので、かへつていつしか、からだが弱くなり、少しの風にも風邪をひき、少しの暑さにもすぐ負けるといふありさまであつた。

そのうちお母さんが病氣でなくなり、遺産のことでこの二人の兄弟は爭はねばならなくなつた。二人はその遺産を、首びきして勝つた方にゆづることにした。そこで二人は悲壯な決心で首びきをはじめた。

英彦權現山と不動山の間にもう一つの山があつた。二人はそれぞれ太く丈夫な繩を首にかけると、うんとうしろにそりかへり脚をそれぞれ前につき出して、中間の一つの山にふみかけて力を入れてがんばつた。

ウン、ウン、ウン、

兩方とも一生懸命であつた。汗みどろになり、手に拳をにぎり、脚にうんと力を

入れてがんばりつづけた。そのため中間の一つの山は兩方からふみよせられて動き出した。その山の名をのちにユルギ岳といふやうになつた。漢字では動岳と書く。

兩方の首ひきは結局、まま子の英彦權現山が勝つた。お母さんに可愛がられて育てられた不動山は、たくましくきたへられて育つた英彦權現山の敵ではなかつた。

この首ひきの時、繩をかけたあとが、今も英彦權現山の頂上にのこつてゐる。一方不動山の首は、あはれにもこの時拔けて、そこから小一里ユルギ岳の方に寄つたところにすつ飛んだといふ。そこに今、首石といふのがあるが、それは不動山の首だといひつたへられてゐる。

尙、この時、不動山から首石までの間、つまり不動山の首がすつ飛んだ間は、首から滴り落つる血のために土が赤く染つたといひつたへられてゐる。そのところは今も赤土であるが、それはこの時からだといふ。

第六十一話　虱太夫とコセカキと眼ただれの話

昔、あるところに、シラミ太夫とコセカキと眼ただれとがゐた。シラミ太夫の頭髪にはシラミが巣をつくつて、いつもシラミがぞろぞろと行列をしてはひまはつてゐた。シラミ太夫はそのため頭がかゆいので、いつも手を頭髪の中につきこんで掻いてゐた。

コセカキはまたからだ中、一ぱいふきでものが出來て、それがよくなりかけたものもあり、新たに出來かかつたのもありで、全身どこもかしこも痒いのでいつもからだをもぢもぢしては手で掻きまはしてゐた。

眼ただれはまた眼のふちが赤くなり、そこにツウロが出來たり、メヤニがたまつたりでそれが痒くて氣持わるいので、これもいつも手をもつて眼をこすつてゐた。

ところで、この三人がある時、山の中の小徑で出あつた。三人が三人ともそれぞれ手を動かして、かゆいところをかきながら、話しあつた。その中、一人が、

「おれたちはいつも手でかゆいところを掻いてゐるが、よそめには非常にみつともない。それで誰が一番いつまでも手で掻かないでゐるか、こらへくらべをしようではいないか。」

といひ出した。

「さうだな、それはおもしろい。」

と他の二人がすぐ承知した。

そこで三人は、おたがひにおたがひを看視しつつ、自分がむづむづ痒いのをこらへて、ぢつと辛抱づよくこらへてゐた。

ところが三人ともさう長くかゆいところを掻かずにをれるものではなかつた。

今にも一人が掻きはじめでもしたら、すぐ自分も掻かうとしてゐた。

そこに猪が遠方にあらはれた。

「ああ、あそこにシシが出た。」

といつて眼ただれはもつてゐた弓に矢をつがへてそれをひくやうにして、實はさつきから搔きたく思つてゐた眼のふちをそつと搔いた。眼ただれはうまうまと他の二人の眼をごまかして、きはめて自然にかゆい目を搔いたのである。

ところがシラミ太夫は眼ただれが「あそこにシシがゐる」と云つたのをきくや、自分のシラミを見つけてさう云つたと感ちがひして、急に首をすぼめ、手を頭にあげて、恐縮するやうなかつこうで、實はそのへうしに痒い頭を搔いた。シラミのことを俗にシシといふからである。(シラミ狩のことをシシ狩といひ、大シラミのことをシシといひ、頭髪に巣喰つたシラミを搔いて髪をモジャモジャしてるのをシシクワツクワとこの地方ではいふのである。)

ところがコセカキは眼ただれが本當の猪をさしてシシが出たといつたのを、シラミ太夫は自分がひやかされたと感ちがひして恐縮さうに、兩手を頭にもつていつて首をちぢめたのがおもしろいといつて、着物の袖口を左右の手の指でつまみ、やつこ凧のやうなかつこうで、着てゐる着物をうごかして、いかにもおかしさうに笑つ

た。實はいかにもおかしさうに笑ひつつ、からだ一ぱい痒くてかゆくてならぬのをうまいぐあひに着物を動かしてこすつてゐるのであつた。

かうして三人が三人とも、ともかく表面はいづれも負けず、しかも何れもめいめいの苦肉の策を見破るものもなく、自分一人だけうまいことしたと思つてゐたといふことである。

第六十二話　味噌豆を便所でおかはりした和尚の話

あるところに寺があつて、そこの和尚さんはたいへん餅ずきであつた。いつも小僧坊主を使ひに出してそのあとで餅を火鉢にやいては一人こつそり食つてゐたのである。それをいつのまにか小僧坊主は感づいて、自分もいつか食ひたいものだと思つた。

ある時、どこかで火事があるといふので、和尚さんは小僧にどこが火事か見てこ

い、といひつけた。そこで小僧は、はい、といつて寺を出たが、自分の出たあとに和尚さんが例によつて餅をやいて食ふにちがひないと思ふと、どうも火事場まで行つてくる氣がしなかつた。そこで、ええくそ、と思ひきつて、中途でひきかへして寺に戻つた。

和尚さんは小僧を火事見に出したあと、悠々と案にたがはず火鉢に餅をやいてたべようとしてゐた。まさか小僧がそんなに早く歸つてくるとは思はなかつた。丁度餅がやけ出して、横つぱらからぷうつとふくれかかつてゐた。そこに、

「和尚さん、只今かへりました。」

と聲がして、ドンドン和尚さんの部屋に足音が近づいてくるので、和尚さんはあはてて、餅を火鉢の灰の中にかくし、そしらぬふりをした。そこに小僧は姿をあらはし、和尚さんの坐つてゐる前にある火鉢のところにきて坐り、

「和尚さん、たいへんでしたよ。」

と云つた。

「火事はどこだつたか。」

と和尚がきいた。すると、小僧は和尚さんがもつてゐた火箸を、ちよと、といつてとりあげ、それをもつて火鉢の中の灰に圖を畫きつつ説明し出した。

「ここが寺の門としますよ、この門を右の方にかういふ具合にゆき、それからまた右に曲り眞直にかういふ風にゆきますと、おやここにこんなのがありました。」

と、火箸の先でかくしてある餅をつきさして和尚さんにさし示した。

「うん、そら餅たい、お前食ひなはり。」

と和尚さんは仕方なくさう云つた。

「ありがたうございます。」

といつて、うまさうに口にほうばりそれを平げると、また先と同じやうに、火箸の先で灰の中を動かし乍ら、

「それから、かういつてまた右に曲り……おやここにもこんなのがありました。」

とまた餅をつきさして、和尚さんの顔を見てにつと笑つた。

和尚さんは惜しくもあり食ひたくもあるが、まさか自分がかくしたのだともいへんので、仕方なく、

「お前は運のいいやつだ、それも食ふがよか。」

といつた。

「ありがたうございます。」

といひ、それを食ふと、また火箸で灰の中をあちこちと動かし、それに一々火事場までの道の説明をするふりをして、餅をみんなさがし出しては食つてしまつた、といふ。

ところでまたこの寺の和尚さんはたいへん味噌豆が好きだつた。

或る日、二人がかりで味噌たきをしたが、その味噌豆に鹽をかけてたべるうまさを思ふと、和尚さんはもうたまらなくなつてきた。しかし小僧のゐる前でそんな行儀のわるいことは出來ないし、また和尚がすれば小僧もすぐ欲しがるにきまつてゐ

るので何とか口實をみつけて、和尚さんは小僧を使に出した。そして和尚さんは味噌豆をどんぶりに山もりに盛つて鹽をかけて食ひはじめたが、いつ小僧が歸つてくるか判らんので、これはこつそりかくれて食つてやらうと思ひ、そのかくれ場所をあれこれと考へた。そして一番安全なのは便所だと考へつき、山もりに味噌豆をもつたどんぶりをかかへて便所に身をひそめ、心を安んじてそこでどんぶり一ぱいの味噌豆を和尚さんは食ひはじめた。

そこに小僧は使から歸つてきた。見ると和尚さんの姿が見えない。庭には味噌豆がほやほやしてゐる。それを見ると小僧は口の中に唾が一ぱいたまつてきた。いい案配に和尚さんの姿が見えないので、小僧はこつそりどんぶりをとり出し、それに山もりに味噌豆を盛り、鹽をかけて、食ひかかつた。しかしどうもそこでは心が落ちつかない。いつどこから和尚さんがのつそりとやつてくるかもわからない。和尚さんに見つかれば、散々うたれるだらうと思ふと、これはひとつ、こつそり身をかくして、ゆつくりゆつくり食つてやらうと思つた。そこでいろいろとかくれ場所を

考へたが、どこも不安でならない。最後に考へついたのがこれも便所である。

「うん、便所がいつち、良かたい。ここならみつけ出さるる心配はなかごたる。」

小僧はにこにこして、ぬき足さし足で便所の方に、味噌豆を山もりに盛つたどんぶり皿をかかへてゆき、便所の戸をあけた。すると便所の中では今しもどんぶり一ぱいの豆を平げたばかりの和尚さんが、どんぶりと箸を兩手にさげてニューッと立つてゐた。それを見た小僧はこらしもた、と思つたがすぐその場の機轉でにつと笑つて、

「はい、和尚さん、おかはり。」

といつて、手にした山もりの味噌豆のどんぶりを和尚さんにさし出した、といふ。

第六十三話　阿彌陀さんこそ迷惑な話

これもまたとある寺の和尚さんと小僧の話である。

そこの和尚さんはたいへんッケアミが好きであつた。和尚さんはいつもッケアミを戸棚の奥にしまつて大切にし、一ぱいのむ時にはそれをとり出して酒のさかなにしておいしさうに食つてゐた。それを小僧は見て、いつかあのッケアミを一口たべてみたいものだと思つてゐた。

ある日、和尚さんがお寺を留守にしたので、小僧は、この時とばかりにかねて知つてゐる戸棚をあけて、中のッケアミをとり出した。そしてそれを一口たべてみると、なかなかうまい。一口だけで戸棚にしまつてしまふには殘念だと思ひ、もう一口たべた。やつぱりうまい。もう一口だけ、と自分にいひきかせ、また一口たべた。そのまま戸棚にしまふにはやはり心のこりがしてならない。和尚さんが歸つてきたら、また一ぱいのみつつこのおいしいッケアミを食つてしまふにきまつてゐる。さう思ふとこのままッケアミをあきらめきれないのであつた。今日を除いてまたいつの日に口に入るやら、この千載一遇のやうな時をのがしたらなかなかまたとこんな好い機會はこない。さう考へると、思ひきつてッケアミをみんな食つてしまつた。

しかし小僧は食つてしまつてから、この後始末をどうしたものかと心配した。和尚さんがこのことを知つたら目の飛び出るほど自分はしかられるにちがひない。いやそれどころかこの寺を追ひ出されるかもしれない。これは何とか一工夫しなければならぬ、といろいろ考へたが、やがてポンとひたひをたたいて、

「うまいことを考へついたぞ、それそれ。」

とひとりごとをいひながら、まだいくらか容器にくつついてゐたツケアミを手の指ですくひとつて、寺の本堂の阿彌陀さんのところにゆき、阿彌陀さんの口になすりつけた。そして何くはぬ顔をして小僧は和尚さんの歸りを待つてゐた。

やがて和尚さんは歸つてきた。例によつて酒をつけ、ツケアミを戸棚から出さうとして戸をあけてみると、いつもそこにしまつておくツケアミがない。おや、どうしたのかと、不思議に思ひ、方々さがしまはつたがやはり見あたらない。和尚さんはすぐ、

「ははア、こりや小僧のやつがなめやがつたな。」

と思ひ、腹を立てて聲も荒く小僧を呼びつけた。

「おれの留守に誰か來たか。」

「いいえ、どなたも見えませんでした。」

「そんならお前だらう、ツケアミを食べてしまつたのは。」

しかし小僧は、

「いいえ、わたくしは知りまッせん。ツケアミのツの字も知りまッせん。」

と答へた。

「お前でなければ誰が食ふか。戸棚の中にしまつてゐたものがなくなつてゐる。お前だらう、このごくどれが。」

と和尚さんはますますいきり立つた。しかし小僧は一向平氣さうに、

「さういへば、和尚さん私がさきほど本堂にゆきました時、阿彌陀さんがしきりにピチャピチャ何かたべてゐられるやうな音をたててゐられましたよ。私はまさか阿彌陀さんが、と思つたので、何か自分の耳のまちがひだらうと見もしませんでした

が、さてはそのッケアミどろぼうは阿彌陀さんかもしれませんよ。」
とまことしやかに云つた。
和尚さんはいくら何でも阿彌陀さんにそんなことがあらうとも思はれないので、
「小僧のやつ、でたらめを云ひやがる。」
とプンプン怒つて、
「そんなバカなことがあるもんか、阿彌陀さんは立派なお方だぞ。」
と小僧を叱りつけた。しかし小僧は、
「和尚さん、私も阿彌陀さんは立派なお方だと思つてをりますバッテン。ッケアミがなくなつたと和尚さんがいはれるので外に誰もとるものはなし、ふとさつき本堂の方でピチャピチャものをたべる音がしたのを思ひ出しましたもんだから。たしかに阿彌陀さんの方から音がしましたばい。」
といひ張るのであつた。そこで和尚さんは念のために本堂の方に行つてみた。するとどうしたことか阿彌陀さんの口のまはりにッケアミがくつついてゐる。和尚さん

はこれを見ると小僧が云つたのは本當だつたと思ひ、にはかに阿彌陀さんに對して腹が立つてきた。和尚さんはやにはに阿彌陀さんを手につかむと、庭にむかつて投げつけた。すると石にあたつて、
クワン！
と音がした。和尚さんはそれを聞くと益々おこつて、
「クワンてちあるか、食つた證據に口のまはりにッケアミがくつついとるじやないか。このウソッキの阿彌陀の野郎！」
と云つて、庭に下りてきてまた阿彌陀さんを手につかむと、今度は、泉水の中にな
げこんだ。
すると、阿彌陀さんの頭の上にほげてゐる穴から水がはいつて、
クタクタクタクタ……
といふ音がして沈んでいつた、といふことである。

第六十四話　エーカンとサソウの話

これもまた和尚さんと小僧の話。

和尚さんはたいへん酒が好きであつた。そこには二人の小僧がゐたが、和尚さんは毎晩二人を早くやすませて自分一人、酒をわかして飲むのであつた。それは實にたのしさうで、ちびりちびり盃を口にあてては酒をふくみ、その味をしみじみ味はふやうにして、いかにも感に堪へぬといふ風に、

「ああエーカン、エーカン(良い燗)。」

と口に出していひ、そしてそれを自分一人で味はふのがいかにも惜しいといつた風に、勝手に相手を想像しては、

「やあ、どうかな一ぱい、サソウ」

といつて、のみほした盃をつき出し、それを他の一方の手で、うけては、それにさ

たなみなみと自分で酒をつぎ、それを口にしては、

「ああエーカン、エーカン。」

とくりかへし、それをまたのみほしてはその盃を片方の手にさし出し、

「ややどうかな、もう一ぱいサソウ。」

といつて渡すといつた、つまり酒をたのしむ和尚さんであつた。

床には就いたが、和尚さんのいかにもうまさうな、エーカン、エーカン、といふ獨り語をきき、またサソウ、といつてさし出すらしい動作を想像すると、二人の小僧はなかなか眠れなかつた。和尚さん一人でうまいことしてる、と思ふと、いつしかこちらも、一ぱいのみてえな、といふ氣に誘はれるのであつた。二人は床の中で、何とかして、あのうまさうな酒をのめる工夫はないものかといろいろ考へてみた。

或る日のこと、二人の小僧は、和尚さんの前にかしこまつて坐つた。

「何か用かな。」

と和尚さんがいふと、一人が、
「はい、私たち二人はいろいろ考へた末、名前をかへることにしました。名前をかへて新しい氣持ではじめたいと思ひます。」
「さうか、そらアよかたい。で、どんな名にかへようとするのかい。」
「私はエーカンといふ名にしたいと思ひます。」
「エーカン？　そらアめづらしい名前だな。」
「私はサソウといふ名にしたいと思ひます。」
「サソウつてや？　ふむ、エーカンにサソーか、どつからそぎやんヒョウナ名を見つけてきたか。」
「はア、あの、そりや、二人でいろいろ考へたのです。」
「まあよいよい、おれのいふことをよくきくことが第一だ。よいか、おれが名を呼んだら、はい、といつてすぐくることだ。」
「はい。」

さて晩になると、和尚さんはいつものやうに、二人の小僧を、はやくねれ、と追ひやり、自分一人、酒をわかして、チビリチビリ盃を口にあてはじめた。そして、
「ああ、エーカン、エーカン。」
としみじみ眼を細めてうれしさうに獨りごとを云つた。耳をすまして、いまかいまかとその獨りごとをまつてゐた小僧のエーカンは、それをきくと、むくりと起きて和尚のところに出て行つた。
「はい、お呼びでございますか。」
和尚さんは思ひもかけずひよつこり出てきた小僧を見ると、折角の氣分もこはれてしまつた。
「何しにきたか。」
「和尚さんが只今、エーカン、エーカンとお呼びになりましたので、ねてゐましたが、起きてきました。」
「エーカン？　ああお前の名はエーカンだつたか、おれはまたお前を呼びおこすつ

もりぢやなかつた。酒のカンがよいので、エーカン、エーカン、エーカン、といつたつたい。まあよいよい、折角お前も起きてきたのだから、そこに坐れ、一ぱいサソウ。」

そして和尚さんが手にした盃を前のエーカンにさし出さうとすると、そこにもう一人の小僧が出てきて、

「和尚さん、何か御用でございますか。」

といつた。

「何も用はない、呼びもしないのに何しに出てきた。」

と和尚さんは不機嫌さうに云つた。

「でも只今、サソウと仰言ひましたので、お呼びかと思ひ、起きてきました。」

「サソウ?、ああさうか、お前の名はサッウだつたな。おれはまたエーカンに一ぱいサソウと盃をやらうとしたのでお前を呼ぶつもりではなかつた。まあよいよい、折角お前も起きてきたから、そこに坐れ。さあ今夜は三人でゆつくりのまう。」

和尚さんも仕方なく二人の小僧を相手にその夜は酒をくみかはしたといふことで

ある。

第六十五話　酒好きな彦一が酒をやめる話

またまた八代の彦一の登場である。

彦一はたいへん貧乏してゐた。貧乏しても彦一は相變らずへうへうとしたくらしぶりだつた。のみたい酒はやつぱりのまずにはをれなかつた。ところで彦一の妻はなかなかしつかりものだつた。彼女は頭がよくてよく働いた。貧乏だつたので金のありがたさをよく知つてゐた。儉約して金をためることを知つてゐた。

彦一は毎晩酒をのむ癖があつた。妻はそのため毎晩酒買ひに出かけた。貧乏なので酒も多くはのめなかつた。彦一はそこで毎晩十錢がたづつのむことにしてゐた。彦一はそれだけのむと滿足してゐた。昔だから、十錢がたでも大分のめたのであらう。しかしその中から妻はいつも二錢づつさしひいてゐた。

ところが、その中、師走になつた。大晦日もせまつてきた。彦一は少し借金をしてゐたので、大晦も近い或る日、金を貸した人が來て、ぜひ戻せと催促され、大へんこまつた。もとより貧乏で、拂ふやうな餘分の金があらうとは夢にも思はなかつた。それで彦一は妻にいつても仕方ないと一人で考へこんでゐた。

妻は彦一が何か苦しさうに毎日考へこんでゐるので、どうしたのかときいた。そこで彦一はありのままをいつて答へた。

「ここに少しの金さへあると助かるばつてんがな。」

それを聞くと妻は、かねてためておいた小金を出してやつた。

彦一はびつくりして、

「どうしてお前はこんなにお金をもつてゐたのか。」

ときいた。妻はそこで、

「實は毎晩あなたがおのみになるあの十錢がたづつのお酒を買ひにゆく時、いつもその中から二錢づつとつてそれをためておいたのです。まさかの時、無一文ではどうにもならぬからと思つたので。」

と云つた。そして、その、まさかの時が今だと思ふので、これを使つてくれといふのであつた。

彦一は非常に感激し、妻に深く感謝した。そして、一人で、わづか二錢づつためてもこんなにたまるのなら、一そのこと酒を全部やめたらどれだけたまるかわからん、と思つた。そして一大決心をもつてその翌年は酒を全然やめた。

さて、また一年が經つて次の大晦日がやつてきた。

彦一は、酒をのんでゐた去年でさへあれだけ金をためた妻だから、今年はおどろくほどたくさん金をためてゐるにちがひないと思つた。今に出すか、今に出すかと待つてゐるけれど、妻はいつから出す樣子がない。そこで、彦一は待ちきれずに妻に催促した。

「おい、今年はどしこどまたまつたかい。」

すると妻は彦一の顔を見て、

「今年は一文もたまつとりまつせんばい。」
と答へた。彦一は怒つて、
「去年でさへたまつたではないか。今年は全然酒はのまんだつたけん、うんとたまつとる筈だ。」
といつた。しかし妻はきつぱりと、
「あなたが酒をやめたから一文もたまりませんたい。去年は上はねができたからたまつたが、今年は全然上はねができんだつたから何もたまりまつせんばい。」
といつたといふ。

第六十六話　錨の模様の着物の話

どこかの日傭とりのやうな仁が、どこかの橋の上を通つてゐると、船が一艘川上の方から下つてきた。その船の上には藝者衆が乘つてゐたが、ふと見ると揃ひも揃つて錨の模様のついた着物をきてゐるのであつた。日傭とりのやうな仁はいくらか風流もわかると見えて、につこりして橋の上から、
「さてもきれいな錨のもやう」
とよびかけた。すると船上の藝者の一人が、それにつづけて、
「風が吹いても流れぬやうに」
とこたへた。日傭とりのやうな仁は、その答へを聞くとすつかり氣に入つて、
「藝者といつてもどうしてなかなか感心なものがゐる。」
と、會ふ人ごとにこのことをほめそやした。するとその話をきいた者はいづれも、
「それや感心感心、風が吹いても流れぬやうに、とはよう云うたばい。なるほど、錨の模樣だけんな、ようできとりますな。」
と感心するのであつた。
くだんの日傭とりのやうな仁は、會ふ人々がみんな感心するので、少しいい氣になつてゐた。家にかへつてくると、細君にむかつて、

「おい嬶ア！世の人は藝者藝者と輕蔑するばつてん感心な者もゐるばい。おれがな、橋の上から見よつたところが、藝者衆が舟遊びしとつたもんね、そるがみんな錨の模様のついた揃ひの着物をきとるもんだけん。おるが、いらんこつばつてん、ちよつと歌の口調でよびかけてみたたい、さてもきれいな錨の模様とな。そしてどう返事があるかと思つてゐたところが、風が吹いても流れぬやうにと船から答へたもんさ。」

と、どうだ感心したらう、といふ風に頸をつき出してみせた。

ところが案に相違なことであつた。彼の細君は、ふふん、おかしくもない、といつたやうすで、

「わたしだつて錨の模様の着物をああたがきせてくれさへするなら、そん位のこつは答へますが。」

といつた。

「うそをいへ、ぬしが出來るもんか。」

「出來ますとも、そん位のこつがでけんでどうしますか。」

「ようし、そんなら錨の模様のついた着物ばつくつてやるけん、云うて見るがえ。」

男は言葉の勢ひで、ついぞつくつてやつたこともない着物を、しかも錨の模様のついた着物をつくつてやつた。

「さあ、出來た出來た。こるば着て云うて見るがええ。」

「言ひますとも。」

細君は仕立おろしの立派な、錨の模様のついた着物を着て男をかへりみた。

「よかですな、わたしははしごだんの上に上つとりますけん、下からああたが言うてみなはりまつせ。」

そして細君は階段を上つていつた。

男は下から聲つくりして、

「さてもきれいな錨の模様」

といつた。すると細君はそれにつづけて、二階から、
「質においても流れぬやうに」
と答へたといふ。

第六十七話　船大工と座頭の話

ある時川尻町の船大工が船をつくつてゐるところに、座頭が一人通りかかつた。座頭は船大工の仕事場の方に寄つてきて、
「大工さん、大工さん、あんたそこで船つくりよるごたるがそらア何反帆ですか。」
ときいた。帆掛船はその帆のひろさで、五反帆、八反帆といふやうにいふならはしである。それはいいとしてしかし、いま通りすがりの人が、そらア何反帆ですか、とだしぬけにきいたので、船大工はひよいと顔をあげてみた。すると、それは何とザトウではないか。めくらのくせに、何反帆もあるもんか、と大工は思つたので、

相手にせずにだまつて仕事をつづけた。
座頭はしばらくまつたが返事がないので、自分のきいたのが相手の大工の耳に聞こえなかつたのか、と思つた。そこで、今度は大きな聲で、
「大工さん、大工さん、あんたそこで船つくりよるごたるがそらア何反帆ですか。」
と重ねてきいた。大工はうるさいやつだと眼をじろりと向け腹たちまぎれに、
「なんかザトウのくせに、云ふたつちやわかりばしするか。」
と云つた。すると座頭は、
「わかる、わかる、云へばわかりますぞ、そら何反帆ですか。」
とおちついて答へた。そのおちつき拂つたやうな態度が大工には生意氣に見えたのであつた。彼は吐き出すやうに、
「ザトウの頭ハッツル(毆ぐる)八反帆だア。」
と答へた。するとザトウは、これもまた負けぬやうな大聲で、
「八反帆だつたか、わたしやまた大工の口糞くたんぼ(九反帆)とおもうとつた

か。」

それをきいた大工はにやりと笑つて、

「ザトウより人間近いものはないね。」

とそらうそぶいた。すると座頭も負けずに、

「ふふん、さういふお前は屁か風か。」

と云つたといふことである。

第六十八話　村一番の長頭をさがし出してきた話

昔は地方には郡代といふものがゐて、郡代様といへば大變な勢力であつた。庄屋といふのもゐるにはゐたが、郡代とはくらべものにならなかつた。そんなにも羽振りの良い郡代様が百姓の家にでもお休憩にならうといふなら、百姓にとつては一世一代の光榮といはねばならなかつた。百姓にとつては膝がしらをがくがくふるへさ

せるほどの大事件であつたのである。そのお休憩に一寸でも粗漏があれば、それこそ百姓はただではすまなかつた。たちまち雷さんにひつつかまれたやうになる。そればかりではない。御機嫌を損じたとなれば、それはその地方全體の百姓たちにもどんな災難となるか知れたものではなかつた。正に虎の尾をふむほどにも氣をつかふのであつた。

ところで、さる地方の百姓の家に、今をときめく郡代様が宿を借られた。それはその地方を巡規するためであつた。宿を借られた百姓は一代の光榮と口ではいひながら、内心では心配でならなかつた。それで一生懸命にもてなしたのはいふまでもない。郡代様はいとうるはしい御機嫌であつた。「御苦勞ぢやつたな」「大儀であつたな」の連發であつた。

さて翌朝になつて、郡代が床をはなれると、百姓は平家蟹のやうに足もとにかしこまつてゐた。

「お目ざめでございますか。」

「うん。」
と、郡代は眼をこすりながらうなづいた。
「いい天氣らしいな。」
「はい、いい天氣でござります。」
「ちようづを持て。」
と郡代は立つたまま鷹揚に百姓に命じた。
「はッ。」と頭を下げて百姓は臺所に走りこんだが、はて「ちようづ」とは何のことであらう、と首をかたむけた。「ちようづ」とは正にはじめてきく言葉であつた。いくら考へてもまるで見當がつかない。百姓は膝かしらをがくがくうちふるはせながら物知りの寺の住職のところにたのみこんだ。
「和尚さん、ちようづとは何でござりませうか。」
とたづねた。
しかし坊さんもそれは知らなかつた。「ちようづ」「ちようづ」と頭をかしげて口

につぶやいてゐたが、ポンと胸をたたき、
「ああやつとわかりましたぞ、ちようづとは長い頭のことにちがひなかです。郡代様は長い頭の男はおらんかいと言ひよらすとですばい。」
と得意然に返事した。
「さてはさうでしたか、なるほど、ちようづですな、長い頭のものをよこせといはれるのですな、やつとわかりました。それでは、この村で長い頭といへば、ええと——」
そして百姓は救はれたやうに元氣になつて長い頭の人間をさがしまはつた。
一方、郡代様は、手水を百姓にたのんだのだがいつまで待つても持つてくる氣配がないので不審に思つていらいらしてゐた。昨日はあれほど氣の利いてゐたあの百姓が、今日はまたどうしたことであらうか、と彼はすこぶる不機嫌であつた。ちようづといへばただ桶に水を入れて持つてくればいいではないか。何も手間ひまのかかることではありはしない。さう思つて癇癪玉を破裂しさうになつた時、庭の彼方

の柴戸を押しあけて、ひようたんのやうに長い頭をふりたてふりたて一人の男がこちらに小腰をかがめてやつてくるのが見えた。この男は百姓がいのちがけでさがしまはつた村一番の長頭の持主であつたのはいふまでもない。

第六十九話　藥屋と呉服屋と酒屋のおかみが屁くらべをした話

或るところに、仲の良い藥屋さんと、呉服屋さんと、酒屋さんのおかみさんがをつた。この三人のおかみさんは永い間の學校友達で、何もかも隱し立て一つしない間柄で、時々お菓子もちよりの茶飲み話をするのが何よりの樂しみであつた。

ある時のことである。この三人のおかみさんはいつものやうにいろんな世間話をしつくしたあげく、「今日は一つおもしろくゆきませう」といふことになつて、おならのしつくらをしませうといふ話になつた。

「では私がお先に。」

と先づ藥屋さんのおかみさんが小さからぬお尻をもちあげて一發すかした。それは「チンピー」と響いた。それは恰度陳皮としやれたやうなものでまことに藥屋さんらしいおならの出しかたであつた。次には呉服屋さんのおかみさんが、

「それではわたし——」

ともつたいぶつたやうに上體をうかして「シュース」といふつつましやかな音を立てた。これもまことに呉服屋さんらしい繻子といふ音に似たもので、おならの出し方にも商賣の氣がしみこんでゐるかのやうであつた。酒屋さんのおかみさんはにやにや笑ひながら、エヘンと咳ばらひをして「シンシ」といふ奴をやつた。無論肥後特產の眞(新)酒を暗示したかのやうな音感であつた。

これで第一回の競屁がすんだが、さて、これではあんまり小さくて引立たないといふことになつた。競屁といふからには超弩級のやつをぶつ放さねばならん、もう一回大きなやつをひりましゆう、といふ話合になり、そこで更にまた第二回の競屁をはじめた。

「いさぎい太かつぱひりますばい。」
藥屋のおかみさんは聲明どほり、着物の裾がふくらむ位の爆音を立てた。
「ぶくりよう」
茯苓(ぶくりよう)ときこえた堂々たる放屁であつた。
これをきいた呉服屋のかみさん、負けるものかといふ恰好で、坐り直す間もなく一發、背後にゐた猫がびつくりして逃げ出したほどの大きなやつを放つた。それは
「どんす」
緞子(どんす)といふひびきであつた。板張りがびりびりとしたほどである。
酒屋のおかみさんは、二人の友人の成績に、それ以上の音を出さねばならぬと、前屈みになつてウンといきんだが、どうしたものか音が出ずに、やがて、きまり惡さうに下の方に手をやつたと思ふと、黄金色豊かな一塊を掌にのせてさし出し、
「おつと、モロミが出ました。」
といつたといふ。

第七十話　山姥を風呂の中に焚きころした話

佐敷といふ田舍に住んでゐたさる仁が、師走も暮に近づいたので或る日、馬をひいて熊本に暮の買物に出た。そして鹽鰤を澤山買ひこんで馬につんで歸途につき山みちにかかると、突然、うしろの方から「おーい、おーい」と呼ぶ聲がした。ふりかへつてみると、それは世にもおそろしい山姥であつた。佐敷の仁はびつくりして馬をひつぱつて逃げようとしたがしかし山姥は、うしろからせまつて、
「きてそのぶり一本かませんか。ぶり一本かませんか。」
といつてきかない。そこで佐敷の仁は仕方なく、鰤一本をとつてうしろに投げてやり、山姥がそれを拾つて食ふ間に逃げようと思つた。しかし山姥はそれを食ひつつ、尙も追つかけて、
「その鰤一本くはせんか。一本くはせんか。」

といつつてせまつてくる。佐敷の仁は、おそろしいのでまた馬の背の鰤を一本とつて後に投げてやつた。しかし山姥はそれでも滿足しないのか、どこまでもどこまでも追つかけて、

「鰤一本くはせんか。」

と同じことをいひつづけ、熊本から佐敷の仁が折角買つてきた鰤をみんな食つてしまつた。佐敷の仁は鰤をみんな食はれてしまつて馬一匹になつて、はうばうのていで逃げた。しかし山姥は、なほもうしろから、

「おーい、おーい。馬一本くはせんか。」

と、せまつてきた。たうとう馬も食はれてしまつた。男は今は自分一人になつていのちからがら走つてゆくと、幸ひ、向ふにあかりがちらちら見えてきた。助かつた、とほつとしてその家に逃げこんでいきをひそめてゐると、やがて足音がどすんどすんと近づいてきた。男はまたびつくりして二階に逃げ上り、ちぢこまつてゐると、山姥がその家にはいつてきた。男がはいつた家は、何と山姥の家だつたのであ

る。山姥は家にはいると、

「今夜は久しぶりにごちさうにありついたぞ。」

と舌なめづりしながらつぶやき、

「もう少し物足らぬけん、餅でん燒いて食はう。」

といつて、餅籠から餅を手づかみにとり出しては圍爐裏の火に燒きはじめた。餅がみんな燒けたので、山姥は、

「どれ、醬油がなけん、醬油とつてこうばい。」

といつて立上つて臺所に行つた。二階にちぢこまつてゐた男はすき穴からこれを見てゐたが、山姥が、臺所に立つて行つたのを見ると、長竿をとり出して、そのさきで餅をとつて、たべてしまつた。二階の男は山姥に追つかけられて逃げ通しだつたのですつかり腹がすいてゐたのである。山姥は醬油をとつて圍爐裏のところに歸つてみると、餅が一つもないので不思議に思つた。山姥は仕方がないのでまた餅籠から餅をとりに行つた。その間に男は醬油を長竿でひつくりかへしておいた。山姥は

餅を一つかみもつてきて元のやうに圍爐裏に燒きはじめたが、燒けたのでいざ食はうとすると醬油がない。仕方がないのでまた醬油をとりに臺所に立つて行つた。その間に男は例の長竿でまた餅をみんなとりあげてたべてしまつた。山姥は醬油をとつてかへつてきたが、歸つてみるとそこにかんじんの餅が一つもなかつた。

「おやおや餅どんなどこさん行かしたろか。こらどんこんならん、そんなら今夜は風呂にでん入つて寢らうばい。」

山姥はさう云つて、今度は風呂にはいつた。そしていい氣持で浸つてゐる中に、つい眠つてしまつた。

イビキが二階までひびいてきた。

佐敷の男は山姥のイビキをきくと、むつくりからだをおこしてそろつと二階から出てきた。そして風呂桶の中にいい氣持で眠つてゐる山姥を見ると、につこり笑つて傍らにあつた風呂の蓋をのせ、その上に大石をいくつものせた。それから風呂の下をどんどん燃して山姥をたきころしてしまつたといふ。

第七十一話　因果はめぐる話

昔、殿樣が家來をつれて地方をめぐつてゐるといつしか日がくれたので、このあたりに泊らうといふことになり、とある一軒の山中の家に立寄つて泊めてくれといつた。家の中から鬼のやうな老婆が出てきたが、見ると立派な身なりの二人なので、たちまちにつこり笑つて見せ家に迎へ入れた。そして老婆はいそいそと臺所に下りて食事の仕度にとりかかつた。

家の中には老婆の外に一人の娘がゐた。娘は大へんきれいで、心もまたうつくしかつた。彼女は殿樣と家來のところに足音をしのばせてやつてきて、そつとささやくやうに云つた。

「ここはおそろしいところです。ここのおばあさんは鬼婆といはれてゐる人です。今おばあさんが御馳走をあなたたちにさしあげますが、それは決してたべてはいけ

ません。私が出しますのはおいしいものではありませんが、それをたべて下さい。」

はたして老婆はしばらくすると、たくさんの御馳走をもつてきて眼の前にならべた。そのかたはらに娘が少しばかりの目にも立たないやうなものをもつてきた。

殿様と家來は、腹がへつてゐたので、御馳走の方をたべたかつたが、娘がいつたことを思つて、娘のもつてきた方だけたべた。老婆は自分がわざわざこしらへたものを食へとしきりにすすめたが、殿様と家來は、箸一つつけなかつた。

翌朝早く、殿様と家來はその家を出た。老婆は二人にまたお出でなさい、といつて手にした饅頭をうしろからなげた。それが殿様の馬にあたつたので、馬はその場に仆れた。饅頭にはげしい毒が入れてあつたからである。殿様はこれを見ると馬をすてて逃げた。しかし馬につけた鞍を思ひ出して、家來に、

「馬は仕方がないがあの鞍は欲しいからはづしてもつてこい。」といひつけた。家來が引返してみると、烏が四五羽たかつて馬の屍體を食つてゐた。家來は弓矢でそれを射殺して、馬の鞍をはづし、ついでに射殺した烏も三四羽とつて來た。

さうして殿様と家來はその日も一日中歩きまはつて、またとある山中の家にとまつた。そして烏を蚊帳のつり手に下げてねた。

夜中に戸をとんとん叩く音がきこえたので目をさましてゐると、家の者が、

「いまあけます、ばばさんですか。」

といつて起きて行つた。

「うん、早よあけんか、ばばたい。」

と外の聲がしたが、それは昨夜泊つた家の老婆の聲だつた。殿様と家來は、とんでもないことになつたぞと顔を見合せた。

その家は老婆の弟子の家だつた。

老婆は弟子に、

「ゆうべは立派な二人の旅人がきたので、殺してやるつもりだつたが、たうとうしくじつた。」

と惜しさうに云つた。するとこの家の主人が、

「その二人が今夜はここにとまつてゐるのですよ。」といつてこちらを指した。
殿様と家來は危險のせまつてゐるのを感じてひそかに刀をひきよせて、寄らば斬らんとかまへてゐた。
しかし老婆とその弟子は「二人を殺すのはあとでよい」といつた風にそのまま酒宴をはじめた。弟子は思ひ出したやうに云つた。
「家にきた二人の旅人が、ええあんばいに烏を三四羽もつてきとりますけん、あれを肴にしまつせう。」
そして蚊帳のつり手に下げられた烏を外してもつて行つた。
老婆とその弟子は烏を肴にしていい機嫌で酒をのんだ。
突然、
この老婆とその弟子は七轉八倒して苦しみ出した。悲鳴をあげ、血を吐き、それはそれはの悶え苦しみがつづいたが、やがて靜かになつた。殿様と家來が蚊帳から起き出てみると二人は酒徳利を中にして死んでゐた。烏の羽根や足が、そこらに散

亂してゐた。
二人が死んだのはいはば天罰とでもいふものであつた。朝がた老婆の投げた饅頭の毒が馬にあたつてその馬が死に、死んだ馬の肉を烏が食つたので烏に毒がはいり、その烏を老婆とその弟子が食つたので、その毒のために死んだのであつた。
殿様と家來はあやふいところでいのちをたすかつた。これもあの前夜の家の心の清い美しい娘のおかげと殿様はおよろこびになり、その娘を城に入れて妻に迎へられたといふことである。

第七十二話　不思議な尺八竹の話

昔、熊本のある士族の家にあつたとつたへられてゐる話。
その家には父と母と二人の子供が住んでゐた。父親は殿様の參覲交代について江戸にのぼつて、あとには母親と兄妹の子供が殘つてゐた。ところが二人の子供は母

親にとつては上の男の子供は繼子で、下の女の子は實の子であつた。兄妹はいたつて仲がよかつた。

母親はいつも繼子がにくくてならなかつた。母親は何かにつけて繼子をいぢめるのであつた。そしては父親のゐない間に一そ繼子を殺してやらうと思ふに至つた。

或る日、母親は二人の子供を手習にやる時、ひるめしをもたしたが、本當の子の方には毒の入つてないものを與へ、繼子には毒を入れたものを與へた。實子は兄のにぎりめしに毒が入れてあるのを知つて、こつそりと兄に、そのおにぎりはたべるなといつて、自分のものをわけてやつた。そして兄のおにぎりを犬にくはせると、犬はころりと死んでしまつた。

母親は繼子が死ぬものと思つてゐたら、何のこともなく歸つてきたので一そうにくにくしくてならなかつた。母親は神まゐりに連れてゆくといつて、まま子を連れだし、神社の近邊にうづめて歸つた。妹は家にいつまでも兄が歸つてこないので、母親にたづねたが、母親は知らぬといつてそのままねてしまつた。妹は兄の身を案

じて家の外に出てあちこちとさがしあるいた。

「兄さん！　兄さん！」

といつてさがしてゐると、神社の森の近くから、「ウ…ウ…」といふ苦しげなうめき聲がきこえてきた。妹が近よつてみると穴の中に兄はうづめられてゐたので、土を掘り出して兄をつれて家に歸つた。

母親は繼子を見ると、にくくてにくくてならなかつた。

この死にそこなひめが！

このごくぬすどが！

と散々こづきまはしては毎日いぢめつけた。繼子はそのたびに江戸に行つてゐる父親を戀しがつた。

或る日、母親は大釜に湯を一ぱい入れて沸らした。その上に一本の木を渡して、繼子に、

「ここを渡ると江戸の父さんが見えるから渡れ。」

といつた。繼子は「いやだ、いやだ。」といつたが、母親は無理に渡らせた。するとたうとう中途でころんで湯の中に落ちて死んでしまつた。これを見てゐた本當の子が、

「私も渡る、江戸の父さんが見たいから。」

といつた。母親がびつくりして、江戸の父さんは見えないといつたが、渡るといつてきかず、たうとう湯の中に落つこちて死んでしまつた。

母親は二人の子供の死體を畑にうめた。

するとそこから竹が一本生えた。それは實に見事な竹であつた。或る時尺八つくりがそこを通りかかつて、この竹を見て、

「これは實に立派な尺八竹だ、一つゆづつてくれ。」

といつた。母親は、尺八竹ときいて、

「この邊で吹くなら賣つてもいいが、江戸にゆくなら賣らぬ。」といつた。尺八つくりは江戸にはゆかぬといつてその竹を買ひとつた。

その竹でつくつた尺八は實にいい音を出した。だんだん有名になつて、轉々と江戸の方に上つて行つた。

この尺八のふくところ、みんな音色におどろいて、立止りかへつて耳をかたむけた。

二人の子供の父親は或る日、江戸の家の中にゐたが、ふとどこからともなく流れてくるかなしい歌をきいた。彼は耳をすました。その歌はだんだん近づいてきた。彼は思はずひきつけられて門に出てみた。すると尺八ふきが尺八をふきながら近づいてくるのであつた。二人の子供の父親は尺八から流れてくる音色の中に自分の子供のかなしい歌聲をききとつた。

江戸の父さん　戀ひしやな

ままは母うらめし　ヒユーヒヨロヒヨロヒヨロ

それはまぎれもない故郷にのこしてきたわが子の歌聲であつた。父親はおどろいて尺八ふきを呼びとめ、その尺八はどこから手に入れたものかときいた。すると尺

八ふきは熊本から手に入れたと云つた。父親は何ごとか不吉なことが自分の不在中にあつたに相違なしと思つて、殿様のおゆるしを得てすぐ歸つた。家にかへつてみると、二人の子供の姿は見えなかつた。母親をせめると病氣で死んだといつた。しかし父親はそれを信じなかつた。なほも責めてゐると、まま母は遂に私が殺しました、と白狀した。父親は大いに腹を立てて、まま母の鼻をきり、耳をきり、眼玉をくりぬいて殺してしまつたといふ。

第七十三話　蕎麥の莖は何故赤いかの話

昔、あるところに母親と三人の子供が住んでゐた。母親は三人の子供をたいへん可愛がつて片時もそばを離れることはなかつた。ところが或る時どうしても母親一人で出かけねばならぬことがおきた。母親は心配して上の二人の子供にむかつて、

「お前たちは十分氣をつけて家をまもつてゐるんですよ。私がゐない間は誰が來て

も戸をあけてはなりません。油斷をするとおそろしい山姥がやつてきます。」

と云つて下の子供を托して出て行つた。山姥ときいただけで上の二人の子供は身をふるはした。

母親の出かけるのを見た山姥は、先づ母親におそひかかつて食つてしまつた。それから母親になりすまして山姥は三人の子供のゐる家にやつてきた。しかし戸がしまつてゐるのでとんとんと山姥は戸をたたいた。

「誰ですか。」と家の中から上の子がきいた。

「お母さんだよ。」

と、外の山姥は答へた。しかしその聲が太くて荒いので、家の中の子供は、

「ウソだ、ウソだ、お母さんの聲はもつとやさしいぞ。」

といつて戸をあけなかつた。山姥はしかたないので、他所から油をのんできて、ま

たやつてきた。

「お母さんだよ、戸をあけなさい。」

その聲が今度はやさしかつたので、家の中の子供はすぐ戸をあけた。山姥は母親に化けてゐたので子供たちは安心して、いつものやうになれなれしくふるまつた。

夜になつて山姥は三人の子の一番下の子を抱いて座敷に寢た。別の室にねむつた上の三人の子供が夜中に眼をさますと、座敷からぽりぽりと何かたべてゐる音がきこえてきた。二人の子供は座敷にむかつて、

「お母さん、何をたべてるの。」

ときいた。すると、山姥は聲づくりして、

「とてもおいしいものだよ、少しあげるからたべてみなさい。」といつて一本の指を投げてよこした。二人の子供はそれを見てびつくりした。山姥が母親に化けてきてゐることがわかつたからである。二人の子供は逃げる相談をした。ぐづぐづしてゐると食はれてしまふからであつた。中の子供が、便所にゆくといひだした。すると山姥の母親が、上の子供に、戸をあけてやれよといひつけた。そこで二人はいい案配に家の外に出て、井戸端の木に登つて身をかくした。いつまでも二人の子供が歸

つてこないので山姥の母親は起き出てきた。そして二人の名をあちこち呼びまはつた。いよいよ逃げられたと知ると山姥は、おしいことをした早く食つとけばよかつたと思つた。井戸端に來てひよいと下をのぞくと水面に二人の子供の影がうつつてゐた。山姥は、ここにゐたのか、おのれのがさぬぞ、と、井戸の中にはいりかけた。それを見て木の上の子供はおかしくなつて笑ひ出した。笑聲におどろいて山姥が上を仰ぐと、めざす二人の子は木の上にかくれてゐるのであつた。山姥は、二人の子供にむかつて、お前たちはどうしてそんな高い木にのぼつたか、ときいた。子供は、鬢つけ油を足にぬつて登つた、と答へた。そこで山姥は鬢つけ油を足にぬつて木にのぼりかけたがつるつるすべつてどうしても登れない。何回しても登れないでふうふうといつてゐるのを見るとついおかしくなつて中の子供が笑つて、

「鬢つけ油を足にぬつて登れるもんか、登るには木に鉈で切り目をつけてのぼるぞ。」

と教へた。山姥はそれを聞くと足の油をとつて木に鉈で切り目をつけて登りかけ

た。それでどんどん登ることが出來た。二人の子供は追ひつめられて上へ上へとのぼつたが、もうどうにも遁れることが出來なくなつた。二人の子供は天に向つて、

「神さま、どうぞ助けて下さい。」

といのつた。すると天から金鎖が下りてきた。二人の子供はそれにつかまりずんずん天にひきあげられて行つた。間一髪のところで二人の子供をとらへそこねた山姥は殘念がつて、二人の子供のやうに天に向つて、

「神さま　どうぞ私にも。」

と云つた。すると天から今度は腐れ繩が下りてきた。山姥はそれにつかまり、天に登りかけたが、中途でぷつつり切れて山姥は蕎麥畑の中にあつた石に頭をうちつけて死んでしまつた。蕎麥の莖が赤いのはその時の山姥の流した血のためだといはれてゐる。

第七十四話　地藏さんがお禮に來た話

雨が降つても日が照つても杉傘をかぶつて商ひに出る德兵衞ぢいさんは正直者であつた。德兵衞ぢいさんは或る日、いつものやうに熊本に出て商ひをして歩いてゐたが、にはかに雨が降り出した。雨の中を歩いてゐると、道端に石の地藏さんが立つてゐられるところに出た。見ると、降り出した雨に頭から全身ずぶぬれになつてゐられるのである。

「まあ、この雨におかはいさうに。」

さう呟いた德兵衞ぢいさんは自分がかぶつてゐた杉傘をぬいで地藏さんの頭にかぶせてやつた。そして自分は雨の中を濡れながら家に歸つた。

家の者は德兵衞ぢいさんが、びしよぬれになつて歸つてきたので、どうしたのかと目をみはつた。ぢいさんはにこにこして、「地藏さんがあんまりおかはいさうだ

つたから傘は地藏さんにかぶせてきたよ。」といつた。

その夜、德兵衞ぢいさんの戸をとんとんたたく者があつた。

「今晩は、今晩は。」

德兵衞ぢいさんは眼をさまして、

「何ですか。」

と戸の方にむかつて訊いた。すると、戸の外から、

「正直德兵衞さんのお宅はこちらですか。」

と云ふ聲がした。

「德兵衞はわしですたい。」

と答へると、にはかに重い物を、どすんどすんと戸の前におく音がひびいてきた。

朝になつて德兵衞ぢいさんは、昨夜の物音を不思議がつて戸をあけたら、そこには千兩箱が幾つも幾つもつみあげられてあつた。德兵衞ぢいさんはしばらく考へてゐたが、

「おう、これは、昨日のあの地藏さんのお禮と見ゆる。」

とつぶやいて大へんよろこんだといふ。

ところが、正直德兵衞さんと同じところに慾深慾兵衞といふぢいさんが住んでゐた。正直德兵衞ぢいさんが雨の日に地藏さんの頭に杉傘をかぶせて歸つたらその夜千兩箱をいくつとなく禮にもつてこられたときくと、自分も早く、あんなに千兩箱をもらひたいもんだと思つた。慾兵衞ぢいさんは毎日天を仰いで雨を降らしてくれとたのんだ。

そして或る日雨が降り出したので、天の助けとばかりうちよろこんで、杉傘をもつて地藏さんの立つてゐるところにゆき、それをかぶせて、自分の名を告げて歸つた。

その夜、慾兵衞さんは、眠りもきらずに地藏さんが千兩箱をもつて禮にくるのを待つてゐた。しかしいつまで待つてもこないので、いらいらしてゐた。

「もう來さうなもんだがな。」

とつぶやいた時、足音が近づいて、戸をたたく音がした。
「今晩は、今晩は。」
「はい、はい、わたしが今日の晝間傘をかぶせた慾兵衛ですよ。」
と慾兵衛ぢいさんはうきうきした聲で云つた。
すると、重い箱を幾つも幾つもはこんでくる氣配である。家の中で慾兵衛さんはもう夢中になつてよろこんでゐた。
翌朝早く、にこにこ顔で戸をあけた慾兵衛さんは、そこに積まれてあるものを見ると、とたんに顔色をうしなつてぶるぶる〳〵出した。
そこに山と積まれてあつたものは、瓦のかけらやら石やら馬の糞やらであつたからである。

第七十五話　按摩に化けてまんまと馳走にありついた狐の話

大木土佐といふ三千石とりの侍がゐた。はじめ佐々成政に仕へてゐたが、成政が秀吉から切腹を申付けられた後は、加藤清正につかへてゐた。關ヶ原の戰に先だつて石田三成は諸侯の妻子を囚へて大阪城中において人質にしようとしたが、この時大木土佐はこれを察して苦心して策を立て、ひそかに大阪の邸にゐた清正夫人を救出し、海から肥後に送つたことは史上の話として傳へられてゐる。彼は清正が死んだ翌日、年六十の身を以て殉死したのであるが、三宅角左衛門といふ侍は「美しい武士だ。」と感じ入つてその死骸から流るる血を掌にうけて涙ながらに押しいただいたといふ話もある。
ところでこの大木土佐が可愛がつて眼をかけてゐた一人に國の市といふアンマがゐた。大へん口ぎれいなアンマで、何を出しても食はなかつた。大木家ではいつも國の市、國の市、といつてみんな親しんでゐた。
或る夕方、その國の市が、いつものやうに大木家にやつてきた。ちやうど大木土佐が夕飯時であつたので、すぐその座にまねかれ、山海の馳走がずらりと國の市の

前にもはこばれた。

土佐は一ぱいきげんであつた。土佐は盃を國の市の方につき出して、

「いつちよ、行かうや。」

と云つた。かねての國の市はたとへどんなことがあつても、決して酒をのまなかつた。ところがその日の國の市は、どうしたことかにつこりして、

「いただきます。」

といつて、盃をうけた。土佐は上機嫌で、何ばいも重ねさせた。國の市は、酒はのむわ、御馳走は食ふわ、で、たらふく胃袋に送りこむのであつた。大木家の女中どもは眼をまるくしてかねてとちがふ今夜の國の市の大食ひを見るのであつた。つひに土佐もそれに氣づいて、

「今夜は、おまへはようたべるなア。」

といつた。

「はい今夜は何でもいただきます。」

と國の市は遠慮會釋なく、つぎつぎにたひらげた。

夜になつて國の市は歸るといつて立ち上つた。足がよろよろしてゐた。土佐は笑つて、女中どもに、

「あぶないから提灯をつけて送つてやるがよい。」

といひつけた。

國の市はよろよろしながら土佐の家を出た。女中どもは提灯の火をつけてからつづいて土佐の門を出た。

ところがいままで醉つぱらつてよろよろしてゐる國の市は、突然、走り出した。女中どもはびつくりして後を追つたが、すぐ行方を見失つてしまつた。

さて、その翌日である。

大木土佐は行列をつくつて熊本城にいつものやうに登城をいそいでゐた。その行列が或る大きな杉の木の繁つてゐる下の道を通りかかつた時である。木の上でカサカサと音がしたかと思ふと、一匹の狐がのびあがつて顔をつき出し、今しも颯爽と

通りかかつた馬上の大木土佐を見ると、大きな聲で、
「ゆふべはだんだん、ゆうべはだんだん。」
と禮をいつたといふことである。

第七十六話　澤庵と長箸と碁盤の話

尾藤金左衞門といふ人のことは前にも書いたことがあるが、この人にはまだいろんなおもしろい話が民間につたへられてゐる。

或る時、尾藤さんは、家來がごはんをたべるところを見てゐたが、その家來はごはんをすましたあと、お湯をついで、それにたくあんをさしこんでまぜはじめた。

尾藤さんは、おかしなことをすると思つて、
「どうしてお前はたくあんでお茶をまぜるか。」
ときかれた。家來は、

「お湯が熱いからかうしてお湯をさますのです。」と答へた。

尾藤さんは、ほう、おもしろい方法があるものだな、とひどく感心してゐたが、それからしばらくして、尾藤さんはお風呂場にいつた。そしてそこから大聲で、
「たくあんを持て！」
と家來に命ぜられた。風呂場からたくあんとはおかしいと思つて顏を出すと、
「早く早くたくあんを持つて來んか、お湯が熱くてはいれんぢやないか、このお湯をたくあんでまぜるのだ。」

尾藤さんは川尻の町を馬上で通るたびに店にならべられた名產草津餅がほしくてならなかつた。それはいつか食つたことがあつて、その時のおいしかつた味が忘れられぬからであつた。さりとてあまたの侍共をつれて行列で通るので、草津餅一つ買ふためにその行列をとめるのも何だか氣まりが惡いやら、威嚴にかかはるやら、大人氣ないやら、侍共から笑はれるかもしれぬ氣づかひやらで出來かねていつも素

通りするのであつた。
「何とかしてあの草津餅を食ひたいものだ。」
「どうしてもほしいな。」
と尾藤さんはいつも思つてゐた。或る時、尾藤さんは一計を案じて長い箸をつくつた。二間もありさうな長い箸である。尾藤さんはそれで遠方にあるものをはさむ稽古をした。
「よしよし、これでよし、これでなら馬上からあの草津餅をはさみとることも出來る。」
と云つてよろこんだ。
その中、また川尻の町を通ることになつた。尾藤さんは馬にのる時、それを手にもつことを忘れなかつた。
行列は川尻の町にはいつた。尾藤さんはかねて知つたる名產草津餅の店を通りかかつた時、馬上から、手にした長箸を店先につきこんで巧みに一つはさみとつた。

ところがである。
折角長箸で巧みに草津餅をはさみとつてはみたが、それを手許に受取ることが出來ない。二間もある箸の先ではさんだのだから、その草津餅をとる方法がない。ぐづぐづしてゐては、それこそ威嚴にかかはるし、侍共や町人どもから物笑ひの種になる。そこでたちまち鷹揚にかまへて、すぐうしろからついてくる侍の眼の前に箸をそのままはして、
「そら、お前にとらするぞ。」
或る時殿樣が集まつた家中の者の前に、一つの碁盤をさし出して、これと同じ大きさのものをつくつて見ろ、といはれた。
皆々、はいッ、といつて城を下つてはきたものの、誰も彼も顏見合せて溜息をつくばかりであつた。
ところが尾藤さんはすこぶるほがらかであつた。尾藤さんは早速大工をやとつて

りゆうりゆうと碁盤をこしらへさせた。そして新しい碁盤が出來上ると尾藤さんは、それを城中に運んでゆき、殿様に差出した。

殿様は、それをごらんになつた。それから自分の碁盤を近侍の者にもつてこらせた。そして二つを合せてみると、寸分のちがひもない出來であつた。

「よく出來てゐる、寸分のちがひもない。お前はどうしてこんなにうまくこしらへることが出來たのか。」

と殿様が目をまるくしてきかれた。そこで尾藤さんは、

「それは何でもないことでした。最初お見せになつた時、私はその大ささを疊の目でちやんとはかつておきましたから。」

と答へたといふ。

第七十七話　恥をかかせた尻を水ひたしにした話

山鹿町に一人の馬鹿息子が住んでゐたが、馬鹿ではあつても年頃になると戀を知つて、いつからとなく熊本に一人の戀人をもつこととなつた。それからといふものは彼は山鹿からその戀人の許に通ふ日がつづいたが、或る日のこと、熊本に出てくる途中で屎をもよほしたくなつたので、とある木の蔭で野雪隱をやつたものである。もうあたりは暗かつた。彼はふところをさがしてもつてゐた紙でお尻をぬぐつたが、何の氣もなく、その紙を彼はまたふところに入れて立上つた。腹具合はよくなつたし、とてもいい氣持で歩き出したが、今度は鼻汁(はな)が出てきたので、もつてゐたふところの紙をとり出してそれで鼻汁をふいた。ところがその紙はついさつきお尻をぬぐつた紙だつたのである。

さて、めざす女の家についた。コツコツと戸をたたいて女の名を呼ぶと、すぐ女は出てきた。そして女は男をつれていつものやうに家の裏の方に連れて行つた。

ところが、まもなく暗の中で、女はびつくりしたやうに、すとんきやうな聲を立てた。

「ちよいと、あんた、どうしたつな。鼻んとつぺんに糞ンついとるばいた。顔ば洗うちきなつせ。」

さう云つて女はばたばた家の中にはいつてしまつた。

男はぷんぷん腹を立てた。家の中に去つてしまつた女をうらめしさうに見て、自分の尻にむかつて腹を立てたのである。

「おどれ、この尻こつちよめ、ひとにとつけむにや恥かかせた。」

男は仕方がないので山鹿の自分の家に歸つてきた。しかしどうしても自分の尻に對する腹立ちはおさまらなかつた。

家の前に井手があつた。朝がたに歸つてきた男は井手を見ると、

「うん、これこれ、おどれ、みとれ。」

とつぶやいて、尻をまくつて、その井手のふちにしやがみ、冷たい流れの中に尻をつき出してひたした。

さうして大分時間が經つた。

「もう尻やつもいきはりきつたろばい。」

彼はやつと氣が晴れたやうに腰をあげた。お尻の感覺は冷たさに痳痺してしまつてゐた。彼はお尻が呼吸はりきつたさまを見てやらうと思つた。家にはいるとすぐ二階にあがつてそこにあつた鏡を立てて彼は尻こつたてて見たのである。

ところで恰度その時、この馬鹿息子が朝つぱらから井手に尻をつけてゐるのを見てゐた十兵衛といふ老人があつた。十兵衛老人は彼の家の向ひに住んでゐるのであつた。

「おやおや、向ひのあん馬鹿息子が、朝つぱらかる井手に尻をつけとるぞ。馬鹿につくる藥はないといふが、こん寒かとけほんに馬鹿ぢやあるわい。一體ありや何するとぢやろか。」

十兵衛老人は興味本位でそつと見てゐたのである。そして馬鹿息子がやつと尻を井手の流れからひきあげて、家にはいり、二階にあがつてゆくのを見ると、老人はまた足音をしのんで後をつけて家にはいり、階段に立つて顔だけ二階につき出して

のぞきこんだ。

恰度この時である、馬鹿息子が鏡を立てて尻こつ立てて鏡の中をのぞきこんだのは。

そして彼はすとんきやうな聲を立てた。そこの鏡には十兵衛老人の顔がうつつてゐたのである。馬鹿息子はそれがほんものの十兵衛老人とは知るよしもないので、

「こらどうか、むつかしいもん、尻のすの呼吸はりきつたのは向ひの十兵衛の顔にいつちよんちがはん。」

といつたといふ。

第七十八話　歌で見分けた嫁もらひの話

或るところに獨身の殿様がゐた。或る日、殿様が外に出て谷川のほとりを通りかかると、みめよい一人の娘が菜を洗つてゐた。殿様は立ちどまりその娘を見て大層

氣に入り、娘の方へ向いて、

谷川に小菜ふりすすぐ小娘は
背丈高ければ妻にしようもの

と歌を詠んだ。すると娘は殿様の方をふりむいて即座に、

山々のつつじ椿をごらうじろ
せい低けれど花は咲きます

と詠んだ。殿様は大へん感心して一層その娘が氣に入り、自分の妻にしようと思ひさだめて、

「明日迎ひにゆくから、母さんにさういふときなはり。」

といつて別れて行つた。

娘は名をおふじといつた。おふじは家に歸ると、このことを母に話した。母はおふじには繼母であつたのでそれをきくと、急に實の娘を殿様にもらつてもらはふと思ひ立ち、翌日になるとおふじには風呂にも入れず、顔も洗はせず、汚ない身なり

をさせ、鍋炭をつけさせて竈をたかせ、そして實の子は風呂に入れ、お化粧も立派にさせ、綺麗な衣裳を着飾らせて、殿様のやつてくるのを待つてゐた。

間もなく、殿様は大勢の家來を連れ、きれいな駕籠をつらせてきた。そしてこの娘を嫁にもらひたい、といつた。

母は大喜びで、殿様をあつくもてなし、ちやほやといろいろ氣に入られるやうなことをしやべり、自分の本當の娘を殿様の前に出した。

殿様はそこで、用意してきたところのものを家來にはこばせた。それは盆の上に皿を載せ、皿の上に鹽を盛り、その上に松の枝をさしたものであつた。家來がそれを娘の前におくと、殿様は娘にむかつて、これを題にして歌を詠んでみよ、と云つた。

娘はかねてから歌など少しも勉強したことがなかつたのでぶつきらぼうに、

盆の上に皿、皿の上に鹽、鹽の上に松

と詠んだ。殿様はびつくりして、

「これはちがふ。この娘ではない、まだ外に娘がゐる筈だ。」

と云つた。母は仕方なく、

「娘はも一人居ることは居りますばつてん、きたない娘でございます。」

といふと、殿様は、

「その娘を呼うでみるがええ。」

と促した。母はしぶしぶながら、よごれかぶつてきたない着物を着たままのおふじを連れてきた。

殿様は早速おふじに向ひ、

「これで歌をよんで見るがよい。」

とそこにある盆の上に皿を載せ、皿の上に鹽を盛り、その上に松の枝をさしたのを指さした。するとおふじはすぐに、

盆皿や八皿が岳に雪降りて
雪を根として育つ松かな

と詠んだ。殿様は、

「これこれ、この娘だつた。これから自分の妻にもらひうくるぞ。」

といつて、風呂に入れ、用意して來た立派な衣裳に着替へさせ、駕籠にのせて、澤山の家來に供をさせて出かけさせた。

愈々おふじの駕籠が家を出ようとするのを見て、繼母はがつかりし、またくやしがつて

「おふじ、おふーじ、昨日洗うた菜はどけおいたきやー。」

と叫んだ。おふじは

今まではおふじおふじと呼ばれても
今から先はおふじさまさま

といつて去つたといふ。

第七十九話　ノッペラポンの話

昔、熊本城の近くの法華坂はものさびしいところであつたが、そこには誰いふとなく、重箱婆が出るといふ不氣味な噂がひろがつてゐた。ところがその重箱婆がどんな婆さんなのか直接見たものは少くて、ただ何となく、おそろしいところだといふ評判のみが高かつた。

その坂の上と下には同じやうな恰好の茶店があつた。よそから熊本の町に入る者は、その坂までくるとやれやれといつた氣持で、坂の上の茶店に寄つて、あたたかいものをのみながら下を見たものだし、町から坂の下まで來たものは、これから熊本の町を離れるといふ氣持で、坂下の茶店で感慨深い茶をすするといふふうであつた。

ある日の夕方、一人の旅人が熊本にやつてきた。ちやうど千箇寺詣のやうな風體

の仁であつた。旅人は坂のところまでくると、下に見える熊本の町の屋根に目をむけて、ほつとしたやうに立ちどまつた。それからすぐそばにある茶店にはいつた。

旅人は、草鞋の紐をしめ直しながら、

「おかみさん、あつたかいものを一つたべさせてくんな。」

と店の奥に向ふむきになつて何やらしてゐる女に云つた。

「はいはい。」

と女は向ふむきのまま答へて、やはり何やらしてゐるやうであつた。旅人はこの時何か思ひ出したやうに向ふむきの女にむかつて、訊ねた。

「さうさう、おかみさん、ここが法華坂といふんだね。」

「はい、さうですよ。」

と女は相變らず顔をふりむきもせずに答へた。旅人はそれを聞くと、

「さうするとここには重箱婆が出るといふはさをきいたが今も出るのかね。」

と興味あるもののやうに問うた。

向ふむきの女はこれをきくと、

「出ますとも、出ますとも。」

と云つた。

「ほう、一體どんなものかね。」

と旅人はますます興味あるもののやうに女のうしろ姿を見ながらきいた。すると女はこの時、

「重箱婆つてこまやんとたい。」

といつてくるりと旅人の方に顔をむけた。旅人はそれを見ると、キャッといつてとるものもとりあへずに茶店を飛び出した。女の顔には眼も鼻も口もなく、のつぺらぼんだつたからである。

旅人は無中で坂をかけ下りた。そして坂下にあつた茶店にとびこんだ。いきがせはしさうで、その上身體中が身ぶるひしてゐた。旅人はそこの茶店の柱につかまり、バンコにやつと腰をおろした。そこにも一人の女が向ふで立働いてゐるやうで

あつた。旅人はぶるぶるとふるへる聲で女に話しかけた。
「おそろしい目にあうた。初めて重箱婆といふのを見た、おい、ねえさん、あんたこんな一軒家にねておそろしくはないかい。」
「いいえ、ちつとも。」
と女はふりむきもせずに返事した。
「さうかい、何しろあんなおそろしいこつはなかつた。思ひ出してもぞつとする。」
と旅人は相變らず生色もなくつぶやいた。するとこの時、向ふむきの女が、
「その重箱婆といふのはこぎやんとだつたですど。」
といつて旅人の方をゆらりとふりかへつた。見ると、その女の顔も目も鼻も口もないのつぺらぼんの顔だつた。
旅人はびつくりした。そしてがたがたと齒をならし、體をふるはし、足をふるはし、髪が總立ちしてそこを逃げ出したといふ。

ところでもう一つ。
本妙寺の方に杉馬場がある。或る人が、本妙寺に詣つて夜おそく、提灯をつけて歸つてきよると千箇寺詣りが現はれた。千箇寺詣りは、近づいてきて、その提灯を見せてくれ、といつた。
或る人は、どうするのか、と訊ねた。するとその男は、脚絆の紐がとけてゐるから、その紐をむすびたい、といつた。
それはお安いご用、とその或る人は無雜作に提灯をさし出してみると、その男の脚は膝頭から下は目玉ばかりだつた。
或る人はびつくりしてそこを逃げ出した。大分行くと、向ふから夜なきうどん屋がやつてきた。或る人はおそろしさのあまり、よなきうどん屋にしがみへついた。
「どうしたのかね。」
とうどんやの主人が云つた。
「いまそこで千箇寺詣りにあつて、提灯を見せろといふので見せたら脚は目ばかり

だつたのでびつくりして逃げてきた。」

とその男はあへぎあへぎ云つた。するとよなきうどん屋は、

「そらこぎやんとじやなかつたかい。」

といつて、自分の脛をはいで相手の眼の前につき出してみせた。見るとそれも先程のものと全く同じく脛に目がいくつもあつてそれがらんらんと光つてゐる。ある男はびつくりしてそこに腰をぬかしてしまつた、といふことである。

第八十話　墓の中で生れた嬰兒と亡靈の話

昔、といつても今から二百年以上ばかり前の頃、宇土町は三萬石細川様の御城下で相當に賑はつてゐた。この町に圓應寺といふ古い寺があつて今も尙現存してゐるが、この寺からあまり遠くないところに一軒の飴屋があつた。

毎日かなりの繁昌であつたが、秋の寂れの見えそめた或日の夕まぐれ、何處から

來たのか色蒼ざめ、髪をおどろにふり亂した一人の女が乳呑兒を抱いて店前に立つて飴をくれといつた。飴屋の者がひよいと仰いでみるとどこの者やら、この界隈には見かけたことのない誠にどうも凄い形相である。しかし商賣ではあるし、別に深く怪しみもせずに二三文の金と引換へにその女に飴を與へた。そして受取つた金を傍らの錢箱にチャラリと投げこみながら、ふいと見ると、今しがたの女の姿はもう店前になかつた。

その夜、店じまひして錢箱をあらためると二三枚の墓花の葉がまじつてゐた。錢箱の中にこんなものを入れたおぼえはないのでどうしたわけだらうと思つたが、しかし別に大したことではなし、それをつまみ捨てるとそのまま忘れてしまつた。

ところがその翌日の夕方、またも昨日の女が髪をおどろにふり亂したままで、乳呑兒をかかへて店前に立ち、飴をくれといつた。錢を持つてくるので店ではその日もまた何の氣もなしに錢をうけとつて飴を渡した。晩になつて錢箱を改めると、またしても入れたおぼえのない墓花の葉が二三枚まじつてゐた。

こんなことが三四日つづいたので、飴屋のおやぢも、少々氣味がわるくなり出した。何としても不思議なことである。入れもしないのに墓花の葉がいつもまじつてゐるのは、どうもおかしい、これとあの毎日、日ぐれ時にやつてくるうす氣味わるい女と何かの關係があるやうだ、と思ひついた。

日ぐれ頃、店前に立つその不思議な女は、いつも同じやうに子を抱いて、顏蒼ざめ、髪はおどろとふりみだしてゐた。飴屋のおやぢは大分用心して女が差出す錢を改めてみるが、その時は別狀なく、そして錢箱に入れる時は他の時と同じやうにテヤラリと音がして手應へがあるのである。それでゐてあの女が歸つたあと調べてみると必ず墓花の葉がまじつてゐた。

疑惑がいよいよ湧いた。近邊の者に話したので、噂は忽ちパッと町中にひろがつた。人々はそんなことがあるものかと一笑に附し、或る者はそれは木原山の狸の仕業だらうとひやかしたりした。

飴屋のおやぢはそれを聞くと一層躍起になつて、或る夕方女が現はれると飴を手

渡して、そしてこつそり女の後を尾けてみた。尾けられてゐると知るや知らずや、くだんの女は素早く飛ぶやうに歩いてゆき、やがて圓應寺の門の中にはいり境内の裏手の墓地の方にすうつと消えてしまつた。

ところで圓應寺の墓地といへば、八重むぐらしげりにしげつて一人行はとても出來ないほどの物凄い處である。飴屋のおやぢは、うす氣味わるい思ひをしながら、あはてて附近をさがしまはつたが、どこに姿をかくしたやらどうしても見出せなかつた。ただまあたらしい墓標が一つ建つてゐるのを見つけただけであつた。どこからともなく生ぬるい風が足もとからおこつて體がぶるつとふるへた。あたりはもう暗くなつてゐた。飴屋のおやぢはその夜はあきらめて家にかへつた。

翌朝になると飴屋の主人は早速圓應寺の門をくぐり、和尚さんを訪ねて、これまでのことを詳しく話して何か思ひあたることはないかときいた。

「さうですな、別にこれといつて思ひあたることもないが、最近一人の若い女が死んで、この寺に埋葬されたことがあるが、まさか……」

和尚さんもあまり不思議な話なので、首をかしげてさう云つた。「何はともあれ、その墓に行つてみませうか。」と和尚さんは飴屋の主人と二人で裏手の墓地に行つてみた。その墓といふのは飴屋の主人が昨夜見かけたまあたらしい墓標であつた。

二人は、意外にもその墓標の傍らに一箇所、拳の大きさぐらゐの大穴が穿たれてゐるのを見つけた。何さまこの穴があやしい、と思つたので念のため早速墓掘連をあつめて掘りかへして見た。するとおどろくべきことには、地下には死人の女に抱かれながら一人の嬰兒がすやすやと眠つてゐるではないか。これには和尚さんも飴屋の主人も墓掘連までもすつかりおどろいてしまつた。

しらべてみるとこの女は石の瀬の家中の女とかで姙娠のまま病死したのを、此處に葬づたのであつた。

腹の中の兒は七月の聲がかかれば母體は死んでも生れるといふことであるが、この兒もやはり墓の中で生れたものとみえ、死んだ母親は子を思ふ一念から亡靈となつて嬰兒に飴をくはして今まで墓の中で育ててゐたものとみえた。嬰兒は割合に健

康ではあつたが、半身がまだ死んだ母親にくつ着いてゐたので頭半分は毛髪も生えてゐなかつた。

このことは忽ち城下の人々の耳をおどろかした。そしていつしか城主細川公の耳にも入り、世にもめづらしい不思議なことである、その子とやらを召連れよ、とあつて、早速その子を御前に出すと、殿は殊の外滿足のていで、土の中で持つたことだから土持といふ姓をとらせよ、とありがたい仰せがあつた。その後、土持は母方の實家に引取られて養育されたがこの人は八十一歳でこの世を去り、それから二代三代とつづいたが、四代目の時、主人が何かの事情で家を出て以來、消息は全く絶えてしまつた、といふ。

これに似た話は、熊本の往生院にもあるしまた人吉の方にものこつてゐる。

第八十一話　萬吉狐と木原孫四郎のだまし合ひの話

木原山の近くに、昔、木原孫四郎どんといふ智慧者が住んでゐた。或る日、孫四郎どんは隈ノ庄に行く途中、橋を渡る時雀がいつぱい群れ遊んでゐるのを見て、これを何とかして捕へる方法はないものかと思つた。隈ノ庄にはいつてから彼はにつこりして手をたたいた。

「よしよし、いい考へがある。」

彼は隈ノ庄のつくり酒屋に行つて、酒の粕をもらつた。それから彼は雀の群れ遊んでゐる橋上にひきかへした。そして手にした酒の粕を橋上にばらまいた。雀はめづらしいたべものが現はれたので、それをあらそつてたべた。ところがしばらくすると、雀の群はどれもこれも、ふらふらした足どりになり、間もなくごろりと横になつてしまつた。酒の粕を食つたのでいつしか酔ひがまはつて、雀たちはいい御機嫌で晝寢したのである。そこで孫四郎どんは、それを全部捕へてかへることが出來たといふが、いはばそんな風な智慧者であつた。

ところがその近くの城の鼻といふところに萬吉といふ狐が住んでゐた。この地方

では萬吉さん萬吉さんといつて親しまれてゐる狐である。

或る日のこと、孫四郎どんが魚賣りに隈ノ庄に行く途中、とある藪かげで萬吉狐が笹の葉をかぶつてお姫さんに化けてゐるのを見た。孫四郎どんはそしらぬふりをして歩いてゐると、萬吉さんはすつかり美しいお姫さんに化けて出てきた。そして孫四郎どんに親しさうに話しかけ並んで歩き出した。

途中、萬吉狐は何とかして孫四郎どんの魚をだましとるつもりであつたが、なかなか思ふ様にゆかないで、たうとう隈ノ庄にはいつてしまつた。孫四郎どんはお姫さんが萬吉狐であることを知つてゐるので心をゆるさず、却つてこちらから一泡ふかしてやるぞと思つてゐたのである。

晝頃になつたので、孫四郎どんはお姫さんに向つて、

「どうですかい、いつちよ晝飯なつと食はうじやなかですかい。」

といつた。お姫さんはこつくりうなづいた。そこで二人は己神屋（料理屋の名）の二階に上つた。

はこばれてくる料理を食ひながら、孫四郎どんはしきりにお姫さんに酒をのました。お姫さんは酔つていい氣持になり、いつの間にかとろりとなつてそこに横になつた。

これを見た孫四郎どんはにつと笑ひて立ち上り、足音をしのんで二階から下り、帳場の仲居にむかつて、

「自分は急用が出來たので一寸出てくる。まだあのお姫さんは二階に殘つてゆつくり歸るとおつしやる。勘定はお姫さんが拂つて下さるよ。」

といひのこして出て行つた。仲居は下でいくら待つても二階からお姫さんが呼びもせず、また下りてもこないので、不思議に思つてそつと二階に上つてのぞいて見た。すると、お姫さんはあられもなく今はすつかり正體をあらはして尻尾を出して眠つてゐた。仲居はびつくりして家中の者にこのことを告げたので、箒やら木刀やらめいめい手にした者があつまり二階の部屋になだれこみ、

「この化け狐め！」

と散々に打ちすゑた。萬吉狐は思はぬ不覺をとり、全身傷だらけになつて半死半生のままやつと身をおこして窓から屋根にとび出して逃げのびた。

これからといふものは萬吉狐は孫四郎どんを怨むこと怨むこと、いつかひどいしかへしをしてやるぞと機會をねらつた。

しかし孫四郎どんの方もさるものである。萬吉狐が、復讐の炎を燃やしてゐるのを知つていつも手に紙袋をもつて歩いた。そして萬吉狐を見ると、その紙袋をひらひらさして、

「いくらお前さんが俺をだまさうとしても同じこつぱい。この紙袋は神通力をもつてゐるから、俺がこれを持つとる限り駄目だ、駄目だ。」

といつた。

萬吉狐はそこで孫四郎どんの紙袋を何とかしてとりあげたいと思つた。いろいろなもので孫四郎どんを誘惑してみるがなかなか手離してくれない。そこでついに思ひきつて、萬吉狐にとつて一番大切な、伏見の稲荷大明神からもらつた金の玉をと

り出して見せて、
「ねえ孫四郎どん、この金の玉と換へよう。」
といつた。孫四郎どんもこのへんが潮時と思つて、
「お前がそんなに欲しいならしかたがなかたい。惜しいこつだが換へてやらう。」
と表面澁々と紙袋と交換した。萬吉狐はこの上なくよろこんで、孫四郎どんから紙袋をもらひうけ、得意になつて、それをふりまはしてゐたが、やがて、それが神通力どころか、ただの紙袋にすぎぬことがわかつたので、すつかり狼狽した。萬吉狐はすぐさま金の玉をとりかへしに行つたが、一度手に入れた貴重な金の玉をやすやすと出す孫四郎どんではなかつた。
そこで萬吉狐は苦心の末に、今度は村長さんに化けて孫四郎どんの家に行つた。そしていろいろな自慢話に花を咲かせた。すると孫四郎どんも、
「わたしもこの頃めづらしいものを手に入れましたたい。」
と調子にのつて、くだんの金の玉をとり出して見せた。

「ほほう、これはおめづらしい。」
と村長さんは眼を細めてつくづく感心するやうに見てゐたが、孫四郎どんが一寸不淨に立つた間に金の玉をもつたままひらりと身をひるがへしてそこをとび出した。
孫四郎どんは部屋にもどつてみると、村長の姿もなく金の玉もないのでうろたへた。すぐさま村長の家におしかけたが、そこでは村長さんはのんきさうに鉢植に水をまいてゐるのであつた。金の玉をかへせ、といふと、藪から棒に何のことぢや、とたしなめられる始末であつた。
さては、あの萬吉狐に一ぱいくはされたか、と孫四郎どんははじめて氣づいた。
「よしよし、そんなら俺も考へがある。」
孫四郎どんは知合の神官の家に行つて、すつかり神官の服裝に身をつつんだ。そして自信たつぷりに城の鼻の萬吉狐の巣の穴に立つた。
「萬吉さん、萬吉さん。」
と穴の口で名をよぶと、萬吉狐はけげんな顔して出てきた。

「わしは伏見の稲荷明神の神官ぢやが、明神様の御使者としてはるばるとやつてきたのは餘の儀ではない。いつぞやお下渡しになつた金の玉をまだ大切に保存してゐるかどうか調べてまゐれとの御事、御保存とあらば見せさつしやい。」

と孫四郎どんの神官はおごそかな口調で宣した。伏見の稲荷様の御命令といふことなので、萬吉狐は今しがた孫四郎どんからとりかへしたばかりの金の玉を、かしてまつて唯々諾々とさし出した。孫四郎どんの神官はそれを手にとり、

「大切に保存の樣子神妙の至り。しかしながら尙これなるものの眞僞を見らねばならぬによつてしばらく借りてゆきますぞ。」

といひ、呆氣にとられてゐる萬吉狐をあとに、悠々として孫四郎どんはそこを離れたといふことである。

第八十二話　死人を眞似て大晦日に借金取をきりぬけた彥一の話

昔、八代に彥一どんといふ人がをつた。

或る年の暮のことである。貧乏の彥一どんにとつてはその年もまた年の瀨をこすことは容易なことではなかつた。先づ正月を迎へる米がない。それに借金は山ほどある。いかな彥一どんもこれにはあをれしをれのていであつた。細君と顏見合せては、どうしたものか、どうしたものかとくりかへすばかりであつた。

しかし日は遠慮もなく大晦日がせまつてきた。このままでは夜逃げするより外に道はない、と細君はいかにもかなしさうに心細さうに云つた。この時彥一どんにひらめいたものがあつた。

「おいおい、そぎやん悲しかごたる聲は出すなよ。今に見とらい、米なんかいくらでも手に入れて見せるぞな。」

彥一どんはにはかに元氣な聲でいふと、裏の竹山に入つて一本の竹をきり倒し、それでサシといふものをつくつた。

「これこれ。」

と彼はそれをふところに入れると、何か自信ありげに、一人うなづきつつ、たのしさうに家を出て八代の出町の入口の大村橋の上にやつてきた。

そこは田舎から町に入つてくる者が、かならず通る橋である。

彼はそこに立つて田舎からやつてくる人々を一々物色するやうすであつた。

百姓達は正月がせまつたので、金を調達するために、米を積んで町に出た。彼等も年末ともなれば色々の買物があるので、米を賣つて金にかへるのであつた。今しも馬に米俵をつんだ男が大村橋の上にさしかかつた。すると、

「ちよつと、お前さん、その米は賣るとだろ。」

と彦一どんがよびとめた。

「へい。」

「うん、そんならおれにも見せるがえゝ。」

彦一どんはおもむろに馬に近づいて懐中からとり出したサシをぶすりと馬上の米俵にさしこんだ。(サシといふのは米質の良否を俵のままで見るもので先が尖つてゐ

てそれを俵につきこみ、そこから米を出して見るやうになつてゐて、手前には米をうけるウケがある。)

白い米がさらさらと快い響きと重さの感じで、サシの上に出てきた。

彦一どんはその米の良否を調べるやうにしてしばらく見てゐたが、

「折角だがもつといいやつが欲しいな。」

といつて、サシを俵から引きぬいた。そこで百姓は人の好ささうな笑ひをもらして馬を引張つて町の方に去つていつた。

彦一どんは相變らず橋上に立つて田舎口の方をぢつと見てゐた。そしてまたやつてきた米賣りの百姓をよびとめた。

「その米賣るとだろ。」

「へい。」

「うん、そんならおれに見するがえゝ。」

彦一は前と同じやうにサシを米俵につきこんで、米の品質を見てゐたが、

「折角だがもつといいやつが欲しいな。」
と前同様に素氣なく云つて、米俵から離れた。百姓男はこれも人の好ささうな笑ひをもらして、町の方に去つていつた。

かうして彦一どんは殆ど小半日ばかり橋上に立つて、米の品質を調べること幾十度におよんだ。通りがかる米賣りの百姓といふ百姓はもれなく彦一どんによびとめられ、例の如くサシをつきこまれて米を見られ、あげくのはてはきまつたやうに、

「折角だがもつといいやつが欲しいな。」とあつさりふられた。

一體彦一どんはどんなよい米を見出さうとしてゐるのか、といふと、さうではない。これは彦一どんの苦心の考案になるもので、米を調べるふりをして、實は米をサシで自分の袂の中に流しこんでゐたといふわけである。彦一どんのサシにははじめからウケが無かつた。しかし彦一どんはウケのあるやうなふりをしてそこをにぎり、丹念にしらべてゐるやうな眞似をして、米俵の中の米を上手に袂の中に落しこましてゐたといふわけである。彦一どんはかうして小半日の間に兩の袂に一ぱいに

なる位に米を得ることが出來た。

「どうだい、えらいもんだろ、正月米が出來たぞ。」

彦一どんは家に歸ると、につこりして細君に兩の袂から米を出して見せた。細君は眼をぱちくりした。

さて彦一どんが百姓の眼をくらまして、まんまと正月米をせしめたことは以上の如くであるが、それだけではまだ正月が越せなかつた。何しろ數年ごしの借金が山とばかりにあつたからである。

「何とかならんかな、借金の方もあの在の百姓連のこつ何とかだまくらかされんかな。」

彦一どんは暮足の早い師走の時間をいらいらしながら考へた。

「なアおい。」と彦一どんは細君にむかつて相談するやうに話しかけてみた。「どぎやんしゆかない？」

「そらあんた、どんこんしょんあるもんかな、無か袖はふれんどがな。」
と細君はふてくされたやうな調子で答へた。
「そぎやんいふたてちや、考へち見ろ、もう三四年間一文もはろとらんとぞ。こんどどまちつと拂はんと立つ瀬がなかぢやなかか。」
彦一どんは頭をかかへてさう云つた。
その翌日はいよいよ大晦日であつた。
朝早く、彦一どんは晴れ晴れとした顔で起きた。そして細君にむかつて、
「なアおい、おらアえええこつ考へたばい。ぬしゃ中島町まで一走り行つてハイヲん腹わたば買うちきなはり。」
と云つた。中島町といふのは魚賣りの多い町の名である。
「なんするかな、藪から棒にハイヲん腹わたば？」
と細君は腑に落ちない顔で彦一どんを見かへつた。だが彦一どんは、
「何でんええたい、はよ買うち來なはり。」

といつてすましてゐた。
細君はそこでそのハイヲの腹わたを買つてきた。彦一どんはそれを見るとにこにこして、
「ええか、おい、嬶あ、おるが腹切つて死んだまねばするけん。ぬしゃハイヲん腹わたばおるが腹ん上にのせてくれ。」
そして彦一どんは佛壇の前に横になつた。細君はいはれるとほりに、ハイヲの腹わたを彦一どんの腹にのせて、その上に着物をかぶせてた。
すると間もなく、案の定、借金とりがやつてきた。借金とりは立ちはだかつたまま、細君にむかつて、
「もうあんた、三四年ちうもんな、利子も一ちよんもろとらん。今年やちつとどまやらにやどげんするかな。彦一どんなどないしとらすとかな。」
となじるやうに云つた。彦一の細君は、袖で眼をふくまねして、
「うちの彦一どんな、しよつ中、申しわけにやとくりかへし男の顔もたたんという

て、心配しとらいたですたい。もうこないだかな今年やちつとでん入れんばとそんこつばかり云ふとらいたですばん。そしてわたしがちよつと外に出とつた間に、腹切つて死ないたですたい。ああたに申しわけなかいうてなア。」

といつて彦一どんの着物をはいでみせた。借金とりはびつくりして、

「ほう、そぎやんでしたかい。そらとほんにやこつでしたな。そるまじ考へこまんてちやよかつたとけ、もうあん金はよかですたい。こちつとばつてん、香奠の代りにとつてくだはり。」

といつて、一二枚の札をさし出した。

「いいえ、ああた、借金もはらひきりまつせんで、申しわけにやといつて死ないたつですけん。」

といつて細君はしきりことはつたが、借金とりの方はうけとらず、

「何ばいふかな。一文なしじや葬儀も出來んばん、まあ遠慮はせんがえゝ。」

といつた。ねてゐた彦一どんも細君のうしろを手でつついて小さな聲で細君に云つ

た。

「無理にいはすとならもろちうつちよきなはり。こぎやん死んだふりしとつともどぎやんきつかかな。」

そこで細君は恐縮さうに手を出してその金をもらつた。

かうして彦一どん夫婦は借金ばらひするどころか、香奠をもらつて、よい正月を迎へたといふ。

第八十三話　彦一と化けくらべして懲りしたおさん狐の話

昔、彦一ちやんといふ頓智者が肥後の八代に住んでゐた。また八代の近くの龍峯山といふところには、おさん狐といはれるなかなか化け方のうまい狐が住んでゐた。

或る日のことである。このおさん狐と彦一ちやんがひよつこり、道ばたで出逢つ

た。もともと顔見知りのこととて、會へばすぐ「よう」「やあ」の挨拶である。彦一ちやんはにこにこして、

「どうだい、お前と化けくらべをして見ゆうかない。」

といつた。するとおさん狐も、

「よかたい、お前が化けきるとは知らんだつたはい。すんならお前のお手並拜見するか。」

「それぢや俺から先にやるけん。お前は明日八代ン植柳の塘に上つてあすこの松の木ィ登つて見とるがよかたい、殿様の行列に化けちみするけんない、びつくりするなよ。」

彦一ちやんはさういひのこして、その日はさうげなくおさん狐と別れた。

さて翌日、おさん狐は、彦一がどんな化け方をするやらと植柳の塘にある松の木に登つて見てゐた。どうせろくな化け方はしないだらう、一つ大いに笑つてやれ、と見くびつてゐたのである。ところが向ふから八代の殿様松井さんのお行列が、下

へ下へ、といひながら槍をたててやつてきた。案に相違のなかなかどうして威風あたりを拂つて豪勢なものである。裸足の先觸の奴が通り過ぎると草鞋に足がためした足輕共が肅々として續き、殿様のお輿の前後には、大小をさし、裃をつけた立派な武士どもが從いてくるのであつた。おさん狐は、はじめ自分の眼を疑つたほどであつた。どうしてなかなか立派な出來榮である。よくもあの彦一がこれだけ見事に化けきつたもんだ、と狐は感心のあまり、

「やアやア、彦一ちやん、ええぞ、ええぞ、こらアどうし、いさぎう（立派に）よう出來とるばい。」

と松の木の上から大聲でほめ立てた。行列の者はこの突然の大聲にびつくりして、足をとめ、顔をあげた。そして松の木の間から狐が手をあげてゐるのを見つけると、「すは狼籍者！」とばかりにバラバラと侍たちが走りよつて松の木をとりかこんだ。狐はびつくりして呼吸をつめて木にしがみついた。下では、

「なんだ、狐か、狐の分際で殿様に對してよくも無禮な雜言を吐きをつたな。けし

からんやつだ、こらしめてくれる。」
と口々にののしりながら待たちは槍の先で木の上の狐をつき落し、さんざんに毆りつけ蹴りつけた。
近くに身をひそめて始終見物してゐた彦一ちゃんは傷だらけになつてキャンキャン泣きながら逃げて行つた狐を見ると、をかしくもあり氣の毒でもあつた。行列はほんものだつたのである。ちゃんと松井の殿様の行列が今日ここを通ることを知つてゐて、狐に化けくらべを申し出て一ぱいくはしたところであつた。しかしさすがに惻隱の情にたへかねて、彦一ちゃんはおさん狐の傷見舞に饅頭を手土産にして出かけて行つた。
「おさん狐どんな居らすかな。」
と彦一ちゃんは狐の穴の入口に立つた。すると子狐が奥から出てきた。
「母さんの傷はどぎやんとした風かな。」
と彦一ちゃんが容態をきいた。すると、

「はい、どうもかうも、ひどい傷で、うんうん呻りつづけですたい。」
と子狐は心配さうに答へた。
「さうかな、そらいかんな。ここに傷見舞に饅頭ば持つてきたけん、かかさんに上げておやり。」と彦一ちゃんはもつてきた饅頭の包をさし出した。子狐はにつこりしてそれを持つて、奥に引つこんで、おさん狐の寢てゐる枕許に行き、
「彦一ちゃんが饅頭ば持つてこらしたばん。」
といつた。するとおさん狐はぶるぶると身をふるはして、
「大切大切、彦一ちゃんの饅頭なら食つちやいかん、そをんにや（大變）化かし方が上手だけん、そん饅頭もきつと馬ん糞ばん。」
といつたといふ。

第八十四話　蕎麥になつた男の話

昔、肥後の松橋といふところに近い田舍に大變な大食ひの若者が住んでゐた。その頃は一體に大食ひがこのあたりに多かつたとみえて、お寺のおときなどでも親椀（普通の茶椀の二倍以上の大きなもの）で十五六杯も喰べる人達がざらにあつて、

佐野ン若衆や十六杯

などと唄に出るやうな風であつたが、その若者は、そんな人たちとかけ食ひをしても、他の村の者と競爭をしても一度も負けたことがないのであつた。

或る夏のこと、その若者が山に行つて一働きをしたあとで、木の蔭で晝寢をしたが、やがて眠りからさめると、横の方でがさがさと音がしてゐた。何だらうと眼をその方に向けると大蛇が人間を呑んだとみえて大きなおなかをして苦しさうにころげまはつてゐた。若者は驚いて呼吸をころし身を小さくして大蛇の樣子をうかがつてゐると、大蛇は山かげの草をなめはじめた。おかしなことをするぞ、としばらく見てゐると、今まで大きくふくれてゐた腹が見る見る中に小さくなつて、大蛇はとても氣持よささうに樂しげに這つてするすると姿をかくしてしまつた。

若者は一人よろこんでうなづいた。そして今まで大蛇がなめてゐた草の生えてゐるところにゆき、

「この草はきつと腹ンへる妙藥に相違なかつぱい、こちよかもん見つけた。これさへあるならどぎやんかけ食ひでん負けはせん。」

とつぶやいて、それをとると、そつとかくして持つて歸つた。

ところがそれから後の或る時——

殿樣から國中の大食ひどもにむかつてそばを食べる競爭をせよ、といふおふれが出た。

皆、食べることにかけては自信のある若者達は、これに應じてわれもわれもと名乘り出た。

例の若者も御褒美をたんまりと戴かうと、自信滿々で出ることにしたが、殿樣の前の、一世一代の晴れの場所だから、今まで一度も着たことのなかつた裃をとり出してそれを身につけ、定めの日に定めの場所にまかり出た。例の草をふところにし

のばせてゐたのはいふまでもない。

やがてそば食ひの競爭が殿様の前で開始された。

十杯、二十杯位のうちは皆、ヘイチャラの様子であつた。しかし三十杯、四十杯と重なるにつれて次第に食べきれなくなつて、落伍する者が續々と出てきた。

かうして最後にのこつたのは、例の若者ともう一人の逞しく肥え太つた男だけだつた。例の若者の方はこの時もう大分苦しくなつてゐた。下を向くと喉からぐつと出てきさうなので、上を向いたまま役人の持つてくるそばをたべてゐた。それも自分では持てないので役人に持つてもらつたままたべつづけた。一方相手はと見ると、まだ大して苦しさうにもなく、悠々として食ひつづけてゐるのである。このままでは駄目だ、負けると思つた若者は、何とかして懐中にひそかに持つてきた祕藥の草をなめたいと思つた。いまあれをなめたら、またきつと澤山たべられるにちがひないと彼は考へた。

そこで彼は一工夫して御不淨を貸していただきたいと役人にたのんだ。役人はど

うぞといつた。そこで若者は手水を使ふまねをして懐中から例の草をとり出してすばやくそつとなめた。

役人は若者がいつまで經つても歸つてこないのでどうしたのかと心配して見に出た。すると若者は廊下の眞中にぢつと坐りこんでゐた。役人は若者がたうとうへたばつて坐りこんだのだと思つた。をかしくなつて笑ひながら、

「もうし、もうし。」

と呼んだ。しかし若者は身動き一つしなかつた。裃をつけ、小刀をさしてきちんと坐つたままどんなに呼んでも返事一つしなかつた。

變だと思つて近づき、手をかけて顔をのぞきこんだ役人は、とたんにびくつとした。何とそれはそばぎりだつたのである。そばぎりが裃をつけ小刀をさして坐つてゐるのであつた。

さて、讀者諸君もおわかりになつたやうに、若者がなめた草は實は、人間のとける祕藥だつたのである。だからなめた若者はすつかりとけてしまつて、あとには食

ぺたそばきりだけが袴をつけてのこつてゐたといふのである。

第八十五話　謎ずきな親爺の話

昔、あるところに大へん謎ずきなおやぢが住んでゐた。ある日の夕方、そこに一人の旅人が通りかかつた。一日中歩き通しで疲れもひどいし、腹もペコペコであつた。旅人はその家を見ると、今夜はここで泊めてもらはう、と思つて立寄り、

「おたのみいたします、ごめん下さい。」

と戸をたたいた。すると家の中からおやぢが顔を出した。

「何の御用ですかな。」

「はい、私は旅の者ですがどうぞ今夜一晩とめて下さらぬか。」

といつた。するとおやぢは、

「ここに泊りたけりや、まづ謎をかけなはれ。」

といつた。

「え、何ですつて？」

と旅人はわけがわからず顔をあげた。

「謎ぢやよ、謎ぢやよ。謎をおかけなされといつとるのぢやよ。ここに泊りたけりや謎をいひなはれ。」

とおやぢはにこにこしていつた。しかし旅人はそれどころでなかつた。謎なんかそんな悠長なことはうかばなかつた。何しろ眼もくらむばかりのひもじさであるし、足も棒になりはせぬかと思はれるほどつかれてゐた。

「おやぢさま、謎もいひますが、とにかく泊めて下はれ。大へんつかれてをりますで、」

と旅人は上り框に腰をかけ脚をさすりさすりいつた。おやぢも見るに見かねて、

「そんなら、まアまア上におあがんなつて。」

といつて座敷に通した。

「謎はまだ出ませぬかな。」
とおやぢはにこにこしていつた。
「え、それが少し腹がへつとりもすで、ごはんをいただいてからにして下さい。」
と旅人はごま化した。
「おいおい、女房や、お客人にごはんをあげてやれや。」
とおやぢは臺所にむかつて呼んだ。すると忽ち女房は膳をかかへてやつてきた。
「さアさア、どうぞごはんを召しあがれ。」
とおやぢは旅人にすすめた。旅人はがつがつとむさぼるやうに平げた。それを見たおやぢは、
「どうですかな、もうそろそろ謎が出さうなもんですな。」
とせきたてた。旅人はいまは逃げ口上もなくなつた。ふと膝に目を落してみると、長旅に汚れた衣服のやぶれから、今しも一匹のしらみがはひ出てきたところであつた。旅人は、幾日も風呂に入らないのを思ひ出した。するとからだ中がむづ痒くな

つてきた。彼はとつさに、
「へこじらみ。」
といつた、するとおやぢはそれを聞くと、にこにこして、女房にむかつて、
「また（股）食ふとおつしやる。女房や、はやうごはんをおかへなさい。」
といつた。
さていよいよ夜も更けてきた。旅人は疲れてゐるからはやく寢たかつた。しかしおやぢはもう一つ謎をといつてきかなかつた。旅人は、すてばちの調子で、
「破れかべ。」
といつた。旅人のゐる部屋の壁が一ヶ所破れてゐたのが目についたからである。するとおやぢは、心得顔に、
「よくおつしやつた。女房や、ぬればよい、とのことぢや。はやう布團を敷いてあげなさい。」
といつた。破れかべを謎ときいて、ぬればよいとおやぢは解いたのである。

全く、けがの功名みたいなものであつた。「へこじらみ」「破れかべ」とでたらめいつて二度の關門を通りぬけはしたが、しかし翌朝また、謎を催促されるのを思ふと、どうも氣が重かつた。これは一つ夜が明けぬ中に、逃げ出すに限ると思つた。そこで一眠りしてからだをやすめると、まだ薄暗い中に、こつそりその家を脱けて逃げ出したところがおやぢはまた無類の早起人であつたので、すぐ見つかつた。

「やアやア旅の人、もう一つ謎を。」

とうしろからいひかけて追つかけてきた。旅人はすつかり驚いて、田の中に逃げこみ、田の中から顔だけ出してふりむいた。すると、それを見たおやぢは、

「ははア、分りました。なるほど、いやなかなか、お上手ですな。朝つぱらから謎謎といつてきたから、たわけづら（田分け顔）とおつしやるか。」

といつたといふ。

第八十六話　馬鹿力の男の話

阿蘇山の麓の或る村に檜の木といふ部落があつて、そこになばとよばれる男が住んでゐた。少し腦味噌が足りない上におそろしく力がつよい男で、「檜の木のなば」といへば遠くまでも知られたものである。

或る年のこと、毎日毎日ひどく雨が降りつづいて、檜の木部落から一里ばかり離れた町の眞中を通つてゐる川の堤防がくづれてしまつたので、その堤防築きの供役に村中の人々がくり出すことになつた。なばもむろんその供役をつとめに出た。先づ竹でしがらみをつくつて堤防を築くので、町中の鉈を借りて竹を切りに行くことになつた。めいめい鉈を借りうけて竹山に行つたが、なばはいくら町中をかけまはつても誰一人彼に鉈を貸す者がゐなかつた。ばか力のつよいなばに鉈を貸しでもしようものなら、それこそ毀されてしまふといふのである。町の人々はこれまで幾度

かなばに物を貸したことがあるが、そのたびに、何でもかでも原形をすつかりくづしてしまはれるので、このバカ力のつよい男には要心して取りあはないのであつた。それでなばは大へんおこつた。町のためにひまぐらしして供役に出てゐるのに感謝どころかろくすつぽ挨拶もせず、鉈一つ貸してくれる者もないのかと思ふと、彼は腹が立つのだつた。

「よしよし、いんま見とらい。」

なばは何ももたずに素手で竹山にでかけた。そして一本一本大きな竹を根から引つこぬいて、それをうつち違がへに（根元と先とを半分々々くみちがへに）して縄でくびり、それを背負つて山を下り、町にはいつてきた。そして町の眞中を遠慮會釋もなく、ガラガラと押し通るのであつた。それで、竹の根とうらとで軒をならべてゐる店といふ店は散々な目にあはされた。

戸はうちこはされ、品物はひつくりかへつたり、こはれたり、破れたり、泥まみれになつたり、それはそれはのありさまであつた。悲鳴をあげるものがあつちこつ

ちに出た。しかしどうにもしようがなかつた。何しろ一人前の男ではないのである。普通の人より腦味噌が足りない上にもつてきて大力ときてゐるので、誰も眞正面からなばのおこなひにくつてかかる者はなかつた。なばは町中をガラガラと押し通り、左右の店を散々な目にあはしてにたにた笑つてゐた。

また或る時のことである。阿蘇の殿様が熊本城に伺候することになつた。その時「檜の木のなば」が力のつよいところから殿様は特に召されて熊本までの駕籠かつぎを命じた。なばは命ぜられたとほり、殿様お乘りの駕籠をひよいとばかりに一人でかついで歩き出した。途中内の牧までくるとなばは煙草をのみたくなつたので、そこの仙石橋の上で立ちどまり、橋の欄干から駕籠を川の上に突き出し、になひ棒の端を自分の肘で押へて、ちよいと一服といつた調子で胴籠を腰からとり出し、煙管を口にくはへて、煙草をつめて燧石を打ちはじめた。そのために駕籠がゆらゆらとゆれるので、これには駕籠の中の殿様はひやひやして、

「こらこら、なば、駕籠を橋の上に置かんか。川の上につき出して無禮であらう

ぞ。」

としかりつけた。しかし叱りつけたはずの聲はむしろ哀願的なひびきであつてなばには一向にこたへなかつた。殿様は川の上に宙につき出された駕籠の中で、なばが燧石を打ちあはすたびにゆらゆらゆれるのを無氣味に思つて生きた心地もなかつたのである。なばは、しかし一向平氣なものであつた。

「殿様もどうです、一服おやりになりませんか。」とひよいとのぞきこんでにつと笑つた。そのひようしに駕籠がゆらりと大きくゆれた。

殿様はアッといつて全身汗びつしよりになり、おろおろした調子でどもりながら、

「ブブ無禮者めが、早く駕籠を橋の上におろさんか。」

しかしなばは悠然たるもので、

「殿様、文句があるなら、肘をはなさうか。」

といひ、手盆に煙管をたたき、また胴籠をとり出して、相變らず燧石をうち合はす

ので、これにはすつかり殿様は降參した。

第八十七話　トノバンの徳兵衛狐と忠吉の話

今の松橋町の一部に田中前（たんなかまへ）といふところがあるが、そこに昔、忠吉といふ魚商人がゐた。

その頃宇賀岳（普通にオカタゲといふ）にトノバンの徳兵衛といふ有名な狐がゐた（トノバンといふのは當尾村とでもいふのであらうか。宇賀岳は當尾村にある）。

トノバンの徳兵衛狐はなかなか人を化かすのが上手だつた。その化かし方といへば、化けてゐるところから人に見せてゐるのが特徴で、或る時、人が見てゐると、菜種の花や蓮華が咲いてゐる畑の中で狐はそれらの花を頭や背中に自分でさしはじめた。だまされるものか、と狐も見てゐると、たちまち美しい花嫁に化けて、歩いて行く。どこに行くかしらとあとをつけてゆくと立派な門にはいつてゆく。そのあ

とをつけると家の中にどんどんはいつて姿を消す。窓を少しあけて中をのぞいてゐると、誰かが、危ない、といふので氣づいてみると馬の尻の穴をあけてゐた、といふやうな話でもしられるのであつた。

ところが魚商人の忠吉はこの德兵衞狐と仲がよかつた。忠吉は德兵衞狐から化かし方の傳授をうけたといふ話さへあつた。

或る晩、忠吉は行商から歸つて一人、戸をしめてゐると、外から戸をたたく音がした。「誰だ。」とさくと「私たい、トノバンの德兵衞たい。」と答へた。そこで忠吉は「德兵衞か、中に入れ。」といつて家の中に狐を入れた。

忠吉と德兵衞狐は火をかこんでいろいろな話をしはじめた。そのいろんな話のあとで、德兵衞は思ひついたやうに、

「時に忠吉つさん、あんた世の中で一番おそろしかつは何かな。」

ときいた。忠吉は、

「おらア鯛の魚と圓札とが一番おそろしか。」

と答へた。そしてつづけて、

「お前は何が一番おそろしかや。」

ときいた。德兵衞狐はいはぬさきから身ぶるひしはじめて、

「瓦屋の白犬と鐵砲がおそろしか。白犬は自分を見さへするとどこまでも吠え立てて追つてくるし、鐵砲はどこからとんでくるかわからんから。」

と云つた。

やがて德兵衞狐は歸るといふので、忠吉は送つて出た。そして宇賀岳にゆく御領の村の出はづれのところまで送つて別れると、すぐさま忠吉は瓦屋の前にゆき自分でそこの白犬をけしかけて德兵衞狐を追はせた。

德兵衞狐は思ひもかけずうしろから追つてきた白犬を見てびつくりして宇賀岳に逃げこんだ。

翌晩、忠吉は魚商から歸つて一人、戸をしめてゐると、外からとんとん戸を叩く音がした。

「誰だ。」ときくと、「私たい、トノバンの德兵衛たい。」と答へた。そこで忠吉は「德兵衛か、中に入るがよかたい。」と云つた。

すると德兵衛狐は、

「ゆうべはおそろしか目にあはせたけん、おれは今日お前にお禮をしにきた。」と云つて、戸をあけて、鯛の魚と圓札とを次々に投げこんだ。忠吉はにつことしたが口には反對に、

「ああおそろしか、助けて！　ああおそろしか、助けて。」

と云つたので、德兵衛狐はいよいよいい氣になつていくらでも鯛の魚と圓札とを投げこんだ。すると忠吉はまた、

「そぎやん投げこむならもうおそろしくて、おそろしくて死んでしまふ。」

といつて床下に身をひそめ、床下から手を出して投げこんでくる圓札と鯛の魚をひきこんだ。德兵衛狐は家の中に一ぱいになる樣に投げこんでしまふと、やつと溜飲が下がつたやうな顏で歸つて行つた。

忠吉は德兵衛狐が歸つてゆくのを知ると、

「どぎやん智慧の多かといふたてちや、やつぱり狐ぢやある。おりが一番好きなやつばおそろしかといふたけん、ありがだまされてこぎやんしこ投げこうじ行つた。」

といつて大いによろこんだ。忠吉は忽ち千兩箱三十もある程の金持ちになつた。また鯛の魚もあんまり多いので熊本の魚市に賣りに出て、大金をものにした。

ところで一夜にして大金持になつた忠吉は諸國見物を思ひ立ち、浪華から京都を經て花のお江戸にはいつた。

或る日町を歩いてゐると、忠吉は、一目千兩といふ看板が目についた。しかし見たところ一向店らしくない。何のことだらうと思つてその家にはいり、一目千兩とは何か、ときいた。すると、一目で千兩、すばらしいもんですよ、といふ答へである。

「すばらしいものなら見せろ。」

と忠吉は云つて千兩出した。すると店の者は、

「一目で千兩、今見せますよ。」
といつて襖をあけた。するとお姫さんのやうな美しい女が見えた。が次の瞬間にはもう襖は直ちにしめられた。
「なるほど、こらどうし、一目で千兩がたあるばい、もう一回見せろ。」
と忠吉はまた千兩を出した。襖が同じやうにあけられ、と思ふとまだ直ちに閉められた。
忠吉はそれだけではどうも滿足せず、また千兩出した。すると三回目は襖の向ふの若い美しい女がにつこり笑つてお辭儀をした。襖はすぐ閉められた。
忠吉はすつかりのぼせた。そしてもう一度見せろとたのんだ。すると女は襖をあけて出てきた。そして忠吉にどうぞお上り下さいといつた。忠吉が上ると、お茶を出し、甘いものを出して歡待した。そして、
「今迄澤山の人がやつてきたがみな一目で歸つた。ところがあなたは三千兩、三度までも見て下さつた。まごころのある人だと思つてうれしく思ひます。」といつた。

それから、
「お國はどちら。」ときいた。
「田中前たい。」と忠吉は答へた。
「ええ、タンカンマへとはどこですか?」
「松橋たい。」
「松橋とはどこですか?」
「九州たい。」
「九州とは薩摩ですか、肥後ですか。」
「肥後たい、肥後たい。」
「遠方からお出でましたね、すぐお歸りですか。」
「すぐ歸ろと思ふとつたい、あんた。」
「あなたの嫁にして連れて歸つて下さい。」
と女は云つた。

「そらこつちからのぞむところたい。」
といつて忠吉はその女を連れて歸つた。
宇土まで來ると、高潮が出てたいへんな被害だときいた。嫁坂に行つて宇賀岳に上り、松橋を見ると、大水が出て慘憺たる有樣であつた。忠吉は、
「こらこまつた。家はともかく、自分にとつては先祖の墓は大切なところ、先祖の墓はどうなつたろか。」
とあはてて山下の方に目を向けると、すつかり墓原は荒れに荒れて、草が生えてゐた。家よりも何よりもまづ墓を立派にしてそれから家をしなければならぬ、と忠吉は早速、墓掃除にとりかかつた。生えてゐる荒草、茅萱をひきぬきにかかつた。すると突然、
「あいたッ、あんた、何ばするとかな。」
と傍らにねてゐた細君が悲鳴をあげて飛びおきたので、忠吉は眼をさまし、びつくりして、

「何だ、今のは夢だつたのか。」
といつたといふ。

第八十八話　思ひつめて石の娃になつた話

熊本城の北の方に平尾山といふのがあつて、昔、その山の附近に平尾長者が住んでゐた。その長者には一人の娘があつた。年は十八の頃で、このあたりにはめづらしい美人であつた。或る日、娘は春の野に出て、今をさかりと咲きほこる櫻の花を見て遊んだ。
その隣村の石塚の麓に石塚長者といはれてゐる、これもやはり長者の家があつたが、そこに一人の若者がゐた。若者もこの日、同じく春の野に出て、あたたかな日の光をあびて歩いた。
若者はゆくりなく娘を見て、その美しい姿に心をときめかした。娘も若者を一目

見てその凛々しさにすつかり戀情をもよほした。二人は青春の日のよろこびを櫻の花の咲くほとりで感じ合つたのである。

ところが、平尾山と石塚山との間には大きな川があつた。川幅もひろく、水の勢ひもつよかつた。若者と娘は毎日川端に出てはみるが、さかまく川の流れをどうすることも出來なかつた。二人は切ない思ひを持ちながら、深いためいきをついて、川ごしに立つたまま顔見合せて、なげくより外はなかつた。二人はしきりに會ひたいと思ひ、渡られぬのを悲しんだ。

或る日、その日も二人はその川邊に出て、立つたまませつない思ひの火をもやしてゐた。恰度その時、一匹の蛙が娘の足もとからひらりと川の流れにとびこんで向ふ岸に向つて泳ぎ出した。それを見送つてゐた娘は、

「わくどどんさへ向ふ岸に泳げるなら、自分も泳げぬことはあるまい。」

と思つてアッと見る間に袂をひるがへしてさかまく川の流れに飛びこんだ（わくどとは蛙の方言である）。もとより水泳などを知らない娘のこととて、忽ち水中にしづ

んでしまつた。しかし娘の一念は凝つて、水中に沈んだまゝいつの間にか石の蛙になつてゐた。

若者の方も娘が川の中に飛びこんだのを見ると本能的にハッとして呼吸をのみ、その拍子にどうしたことかこれも石の蛙になつてしまつた。

それから數千年經つた今日、もう平尾山と石塚山の間の川の流れは涸れてしまつて、ただわづかに砂礫や岩石で昔の川の名殘をとめてゐるが、しかもこの砂地の涸川には二匹の石の蛙が今も栖んでゐて、毎日會ひに通つてゐるさうで、この二匹の石の蛙の間には一本の通路が出來てゐるといふ。そして人がそこを通つてみると、女の方の石の蛙は、低いところにあり、男の方の石蛙は高いところにあるが、これは女は岸邊から流れに飛びこんで川底に沈んだから低いところにあり、男は岸邊に立つたまゝハッとして石蛙になつたので、高い所に今もあるのだとつたへられてゐる。

第八十九話　鐵砲の先をツン曲げて鴨を撃つた話

隈ノ庄といふところに權現さんがあつて、その權現さんの近くに堤があつた。

或る時一人の獵師が、そこを通りかかつたが、ふと見ると堤のほとりに鴨が八羽並んでゐるのが見えた。

これはよき獲物、とばかり獵師は緊張して銃を肩よりおろしたが、獵師のゐるところからでは、鴨の列は直角をなしてゐるので、折角これだけの鴨を見ながら、あたり前に撃てばただ一羽しか撃てないことになる。銃彈はただ一發しかないし、これは一工夫しなければならぬ、と獵師はとつおいつ考へた。鴨と同じ列に立つてうてば、一發の銃彈で全部撃つことは出來るが、そこには崖があつてゆけないのである。そこで獵師はいろいろ考へた末に、「さうだ、かうすればよい。」といつて、銃の先をうまい具合につん曲げた。そしてねらひをつけて發砲したら、案の定美事に八

羽の鴨を次々に銃彈はとほして、たつた一發にして皆をしとめることが出來た。獵師は鼻高々と八羽の鴨をぶら下げたが、ふと見るとそこからほど遠くないところに狸が一匹苦しげに身をもがき、土手を手足の爪で引つ掻いてゐた。獵師が鴨を撃つた銃彈が更にその先にぽやつとして晝寢してゐた狸にあたつたのである。狸は間もなく土手の土を引つ掻き乍ら死んだ。獵師は思はぬ獲物を得て大よろこびで、八羽の鴨の外に狸一匹も肩に引つかけたが、その時、彼は今し狸が苦しまぎれに土を掻いた土手から見事な山芋が現はれてゐるのを見つけた。

「おや、おや、今日は何といふあたり日だ。」

と彼は五百匁もあらう山芋をそこからとり出した。泥のままぶらさげて歸るわけにはゆかず茅萱でつつまうとして、彼はその附近の茅萱を腰にもつた鎌で勢よくサクサクと刈りとつたが、その時、その萱の中で巣ごもつてゐた雉子の頭を鎌でかき落してしまつた。

「これはどうじや。」

とまたしても思ひかけぬ獲物を得て獵師はすつかり有頂天になつた。そして頭をかき落した雉子をにこにこしてひつつかんで持ちあげると、下から美しい雉子の卵が五つ六つ現はれた。

「わア、卵まであつたぞ。」

と獵師は、それをも手にひつつかんだ。考へてみると、鴨八羽に狸一匹、山芋五百匁に雉子一羽に雉子の卵六つといふすばらしい大獵である。これがたつた一發のこつてゐた銃彈から出てきた結果なのでまるで夢のやうな氣がするのであつた。

獵師は意氣揚々として家路についた。歸る途中に小川があつた。彼はそれをピンととんだが、あやまつて小川の中にはいつた。その拍子に兵子のマヘコがぶらさがつて水につかつた。彼はあはててマヘコをあげたが、その時雜魚が三百匁ばかりすくひあげられたといふ。

第九十話　何故によい初夢を人に話さないかの話

或る所に三人の男がゐた。お正月が來た時、主人は三人の男を呼んで、初夢をみんな話せ、と云つた。二人はすぐ話したが、一人だけは、どうしても話さない。主人は口がすつぱくなるほど話せ、話せとくりかへしたが、どうしたのかいつもは素直に何でもはきはきするのだけれど、初夢だけはどうしても話さうとしない。そこで主人は腹を立てて、話さんなら出て行け、といつた。

それでその男は仕方なく主人の家を出て、自分の實家に歸つた。實家では父親がゐたが、ひよつこり歸つてきた息子を見て、けげんに感じ、どうして歸つてきたか、ときいた。男は初夢の話をしなかつたので、もどされた、といつた。一體どんな夢を見たのか、と父親は案じるやうに云つた。すると男は、

「主人にも話さぬ話ば何の親に話さうかい。」

と答へた。父親は怒つて、
「そんなら出てゆけ！　親のいふことをきかぬ奴は家におくわけにゆかぬ。」
と云つた。そこで男は仕方なく家を出た。奥山にむかつてあてもなくぶらぶら行つてゐると、やがて日がくれかかつた。男は野宿をしなければならぬと思つた。そして、とある大木の下に立つた時、雲つくばかりの大男が現はれて、
「お前はどうしてそこに立つとるか。」
と云つた。男は、
「そおんにや良か夢見たけん立つとる。」
と答へた。
「そぎやん良か夢見たなら俺に話せ。」
「主人にも親にも話さぬ話ばどうしてぬしに話すことが出來るか。」
しかし大男は是非でも話せといつて男にせがんだ。男は、もてあますやうにして、
「何かよかつばやるなら話す。」

と答へた。大男は、よろこんで、
「千里玉と熱ダシと熱サマシばやるけん話せ。」と云ひ、大切にしてゐる箱の中から三つのものをとり出して男にやつた。
「そら、千里玉と熱ダシと熱サマシとやつたけん話せ。」
と大男はせまつた。男は落ちつき拂つて、
「そんなら話すがよかか。」
と云つた。
「よか。」
「はいッ！　千里玉。」
と男は大聲で云つた。すると途端に男は、ふはりと空中にとび出し、矢のやうな勢ひで千里の彼方に飛んだ。
大男は、これを見て地だんだふんでくやしがつた。大男は化物だつた。化物は、
「しまやかいた。」（しまつた！）

といつて自分の栖家に姿をかくした。

さて男の方は、千里の彼方の空にゐて、どこに落ちるかしら、と思つてゐた。

下り立つたところは東の長者の家であつた。男が、きよときよと眼を動かしてゐると、下女が出てきた。下女は男にむかつて、

「お前は何しに來たか。」

ときいた。男はすまして、

「私は雇ひてがあるならいさぎよかけんと思つてやつてきました。」

とでたらめを云つた。下女は、

「恰度よかつた、風呂たきをさがしとつた。おどんが云つてたのんでやらう。」

と云ひ、奥の方に引込んだ。がしばらくすると出てきて、

「いよいよ今日から風呂焚きばい。」

と云つた。男は風呂場につれてゆかれて、その日から風呂焚男になつた。

その家には立派な一人の娘がゐた。男は或る時、そのきれいな娘とすれちがつた

時、熱ダシで相手に氣づかれぬやうにつくじつた。

すると俄かにその娘は可哀さうに大熱が出た。家中の者がびつくりして、上を下への騒ぎになつた。

「醫者を！　醫者を！」

と呼ぶ聲がし、誰かが走り出した。間もなく醫者は馬をとばしてきた。そして脈をとつてみたり、舌を出させたり、眼をひつくりかへしたり、また投藥もしたが、一向利目がなかつた。

男は風呂焚きをしながら、

「藪醫者ばかりそらうとるばい、俺がいつちよなでるならすぐようなるばつてん。」

と獨り言をいつた。通りがかつた下女が、それをきいて、生意氣な風呂焚奴とばかりに、そろつと長者に告口をした。娘可愛さに胸一ぱいの長者は、それをきくと怒るどころか、その男をつれてきてくれ、とすぐこる叮嚀であつた。下女は、あてがはづれて妙な氣がした。それで、

「あの男はすすけとりますがよございますか。」と云つた。
「よかとも、よかとも、すすけとつてん黒ん坊どんでん遠慮はいらん。はよ連れてお出で。」と云つた。そこで下女は男を連れて出た。
「お前さんは熱を下げる力をもつてゐるさうだね、この娘のいのちをたのむ。」
と長者が云つた。男は、
「お嬢さん、どこが痛うございますか。」
といひながら、熱サマシでからだ中をなでてやり、それから、
「私が風呂場に行く時やもう熱がさめとりますばい。」
と云つてそこを立つた。はたして男が云つたとほりに男が風呂場についた頃には、さしもの娘の熱も、すうつと下つてゐた。
「こりや娘のいのちの恩人。」
と長者はよろこんで男を再び風呂場から上にあげ、大切にし、つひに娘の、おむこさんにさした。

ところが西の方に西の長者の家があつた。東の長者の娘婿となつた男は或る日、遊びに西の長者の家に行つた。ところが、そちらにもきれいな、若い娘がゐた。この娘もなかなか別嬪と男は思つた。すると急に例の熱ダシでつくじつてみたくなつた。男は、ずばやくつくじつた。そしてそしらぬふりをして東の長者の家に歸つてゐると、あはただしく西の長者の家から使がきて、
「お嬢さんが大熱で大變です、どうぞ助けて下さいと西の長者のおたのみです。すぐ來て下さい。」
と云つた。そこで男は二人力の車に乘つて西の長者の家にかけつけた。
男は、お嬢さんの病床に坐り、熱サマシで、からだをなでた。するとうそのやうに、さしもの大熱が、すうつと下つた。娘の命の恩人だといふので、西の長者は男に是非うちの娘の婿にもなつて貰ひたい、といつた。
そこで男は五日ごしに東と西に泊つた。しかし、それは不便でもあり、また兩方の女に不安を與へるので、のちには同じ家に住むやうにした。まさに男は兩手に花

であつた。

男はその夜、二人の女に話した。

「俺は今こんな身分になつたが、これは金の大黒さんを、うしろ前に抱いた初夢を見たのを今まで誰にも話さなかつたからだよ。あの時このよか夢を話してゐたら、それつきりの筈だつた。」

第九十一話　タニシが孝行した話

昔、或るところに、おぢいさんとおばあさんが暮してゐた。一人の子供もゐないので、大變さびしがり、いつからとなく、おぢいさんは大きな握飯をもつては毎日子供をもらひに出かけてゐた。しかし、なかなか子供をもらひ出すことは困難であつた。

或る日、おばあさんは、

「おぢいさん、今日どま見つけておいで、握飯も大きかつばやるけんな。」

と云つて、おぢいさんを送り出した。おぢいさんは、道々子供を、さがしさがし歩いて、とある橋の上に來た。すると下の方から、

「ぢいさん、ぢいさん。」

と呼ぶ聲がした。おぢいさんは、誰が呼ぶのかしら、と下を見ると、

「ぢいさん、ぢいさん、ぢいさんは息子をさがしよつとだろ。」

といふ聲が聞えた。

「うん、息子を見つけよつとたい。」

とおぢいさんが答へると、

「そんならわたしば、もらうてはゆりよ。」

と云つた。おぢいさんは、ぞろこんで橋の下に下りて行つて、

「どけおるかい。」

といふと、